

校區遷變略圖



自明治廿五年四月至明治廿六年三月
白川、多井畑兩分校成立

附表二

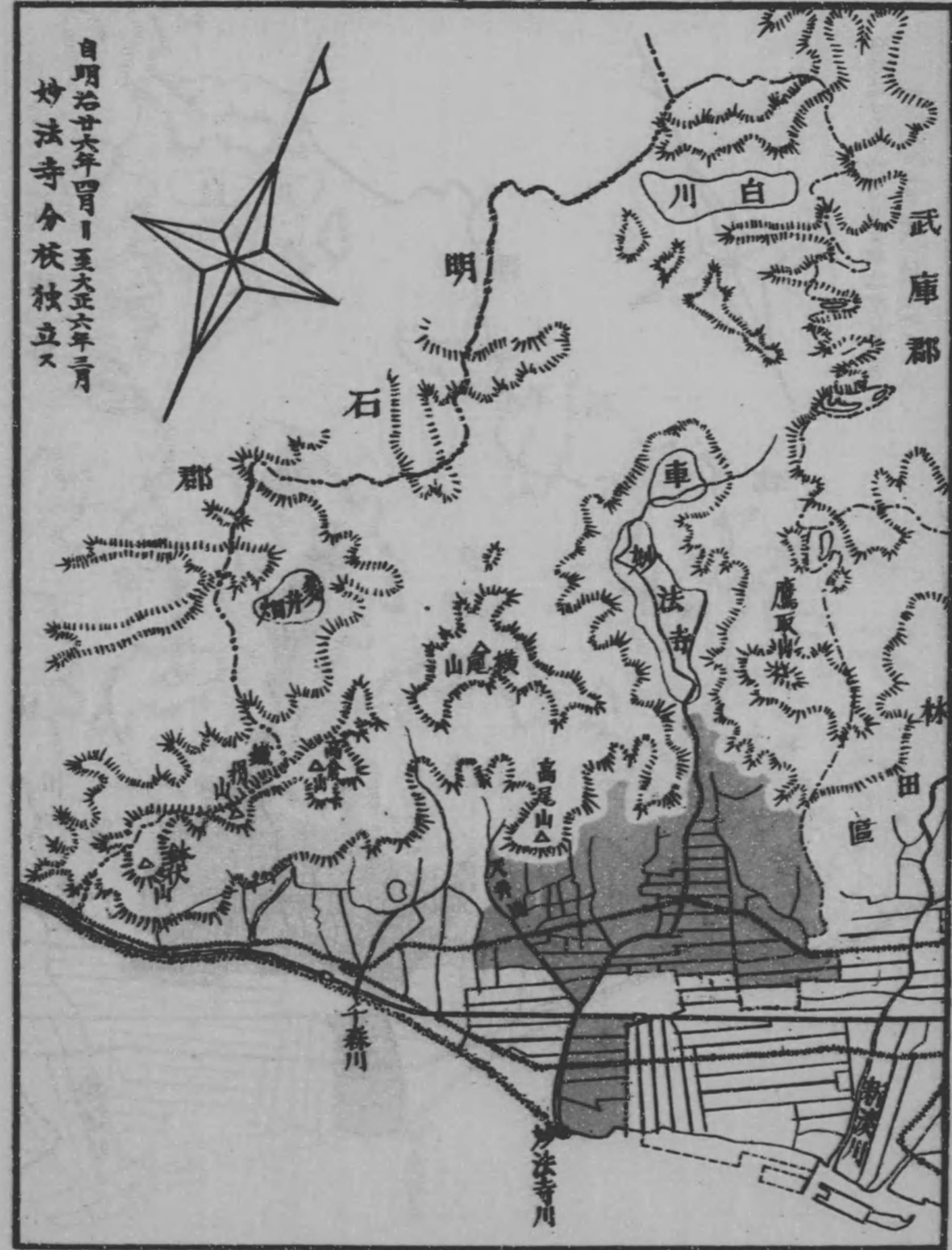
校區遷變略圖



自明治廿五年四月至明治廿六年三月
一、谷分校成立

附表三

校區遷變略圖



附表四

自明治廿六年四月一日起至大正六年三月
妙法寺分校成立

校區遷變略圖



附表五

自大正六年四月一日起至大正十一年三月
天井川以西須磨校へ転籍

校區變遷略圖



附表六

校區變遷略圖



附表七

校區遷變略圖

附表八



自昭和五年九月一至昭和十三年三月
 板宿、板宿校へ転籍し、天井川以西の一部ヲ改定ス

校區遷變略圖

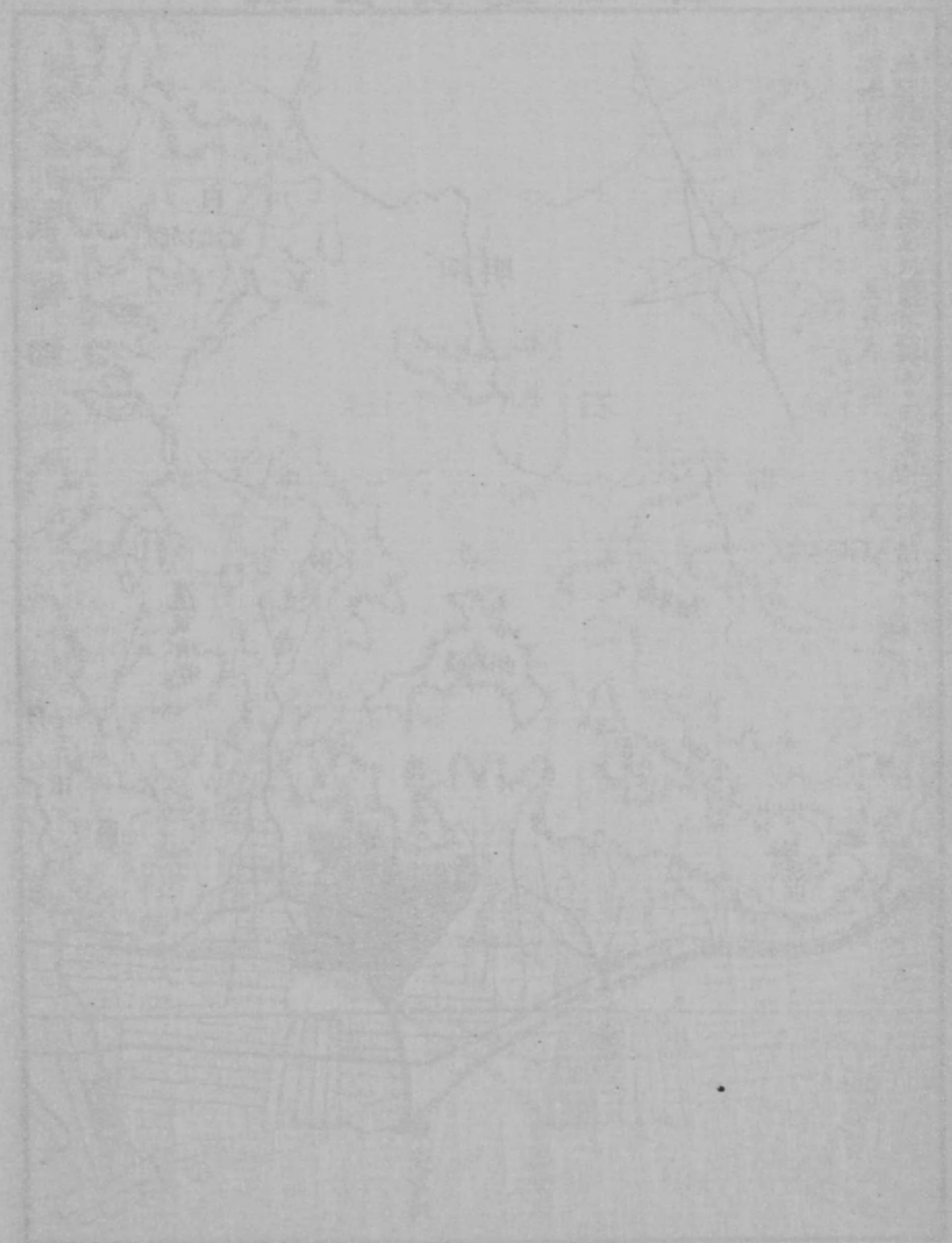
附表九



自昭和十三年四月一至今現在
 鉄道線路以南ヲ若原校へ、桑川以西ヲ須磨校へ転籍ス

東 細 澤 町	長 池 町	上 堀 内 町	西 寺 田 町	東 寺 田 町	同 三 丁 目	戸 政 町	權 現 町	同 九 丁 目	同 七 丁 目	同 五 丁 目	同 三 丁 目	同 三 丁 目	大 手 町	我 町	同 七 丁 目	大 田 町
二	三	三	二	七	二	五	四	二	一	一	二	二	三	七	六	五
一	五	七	六	〇	四	一	三	一	〇	〇	七	一	一	六	四	四
三	二	九	四	二	一	八	三	三	〇	二	六	二	一	一	一	九
上 細 澤 町	椎 ノ 木 町	下 堀 内 町	下 寺 田 町	中 寺 田 町	同 四 丁 目	戸 政 町	同 三 丁 目	權 現 町	同 一 丁 目	同 八 丁 目	同 六 丁 目	同 四 丁 目	大 手 町	我 町	同 六 丁 目	大 田 町
一	二	一	二	三	二	二	三	二	一	二	一	一	四	五	五	四
五	三	九	六	七	四	八	九	五	一	八	四	四	六	五	三	二
一	三	二	七	五	一	〇	四	一	六	二	九	七	五	七	一	三
三	五	四	五	七	四	六	八	四	二	七	五	二	九	一	九	七

現行通學區域の町名及兒童數 (昭和十五年九月現在)



五	水澤五十馬	(二・九)	二四・四	二六・二
六	黒田正策	(二・三)	二七・一	二九・三
七	見畑正甫	(一・四)	二九・四	三〇・七
八	高雄子郎	(〇・五)	三〇・八	三〇・二
九	吉原誠一郎	(〇・三)	三一・一	三一・三
十	本庄介二郎	(一・〇)	三一・四	三二・三
十一	富上庸重	(五・九)	三二・四	三七・二
十二	宮崎勝藏	(一・三)	三八・一	三九・三
十三	朝倉景信	(九・二)	三九・四	四一・五
十四	森中美景郎	(〇・二)	四一・六	四・五
十五	吉田六太郎	(一・六)	四一・七	四・六
十六	吉木政藏	(一・二)	四一・七	五・二
十七	森本俊治	(三・三)	四一・七	六・一
十八	古島清太郎	(〇・五)	四一・八	六・四
十九	並河忠藏	(六・七)	四一・九	八・八
二十	菅原貫治	(一・一〇)	四一・九	一五・三
二十一	長島淳一	(〇・二)	四一・九	昭和三・一
二十二	植芝康起	(五・〇)	三・四	昭和三・三

下細澤町	四	兼廣町	一
下兼廣町	二七	寺畑町	四
山畑町	四	奥山畑町	〇
水野町	五	大池町	四
上中島町一丁目	一六	上中島町二丁目	二七
同三丁目	二八	下中島町一丁目	四
下中島町二丁目	二二	東須磨火ノ谷	一
大手字斧ノ角官有地	二八	東須磨字堤官有地	二
東須磨字三ノ井官有地	八	東須磨字二ノ井官有地	〇
區域外	一〇		〇
總計	男 一三二名	女 一三二名	計 二六四名

順位	氏名	就任年月	退職年月
一	明治十九年前不詳		
二	坪内要太郎	自明治二〇・七至同	二二・二
三	小寺勝藏	二二・三	二二・一
四	酒井敬八	二二・一	二四・三

二十三 近藤政好 (四・四) 八・四一 一二・七
 二十四 山下元治 (現在) 一二・七一

2、本校奉職十年以上の教員・看護婦奉職者

(○印は本校現職員、()内の数字は本校奉職年数を示す)

▲本校奉職二十五年以上の芳名

年月 年月 年月

小高實藏 (二五・五) ○長谷川章三 (二五・六)

▲同二十年以上の芳名

近藤政好 (二三・四) 小山よし (二三・二) 寺内こむめ (二〇・七)

○安田悦二 (二〇・六)

▲同十五年以上の芳名

○藤田秀人 (一七・六) 近藤清七 (一六・二) 佐藤熊太郎 (一七・一)

○西村節藏 (一六・三) ○山下元治 (一五・四)

▲同十年以上の芳名

石野昇 (一一・六) 平松(田中)悦治 (一三・二) 柳井覺二 (一一・二)

島津新治 (一二・〇) 富士晴子 (二二・〇) 吉田(平野)亮 (二三・〇)

○福永(三宅)省吾 (一一・〇) 松本幸次郎 (二二・〇) 小林備次 (二三・九)

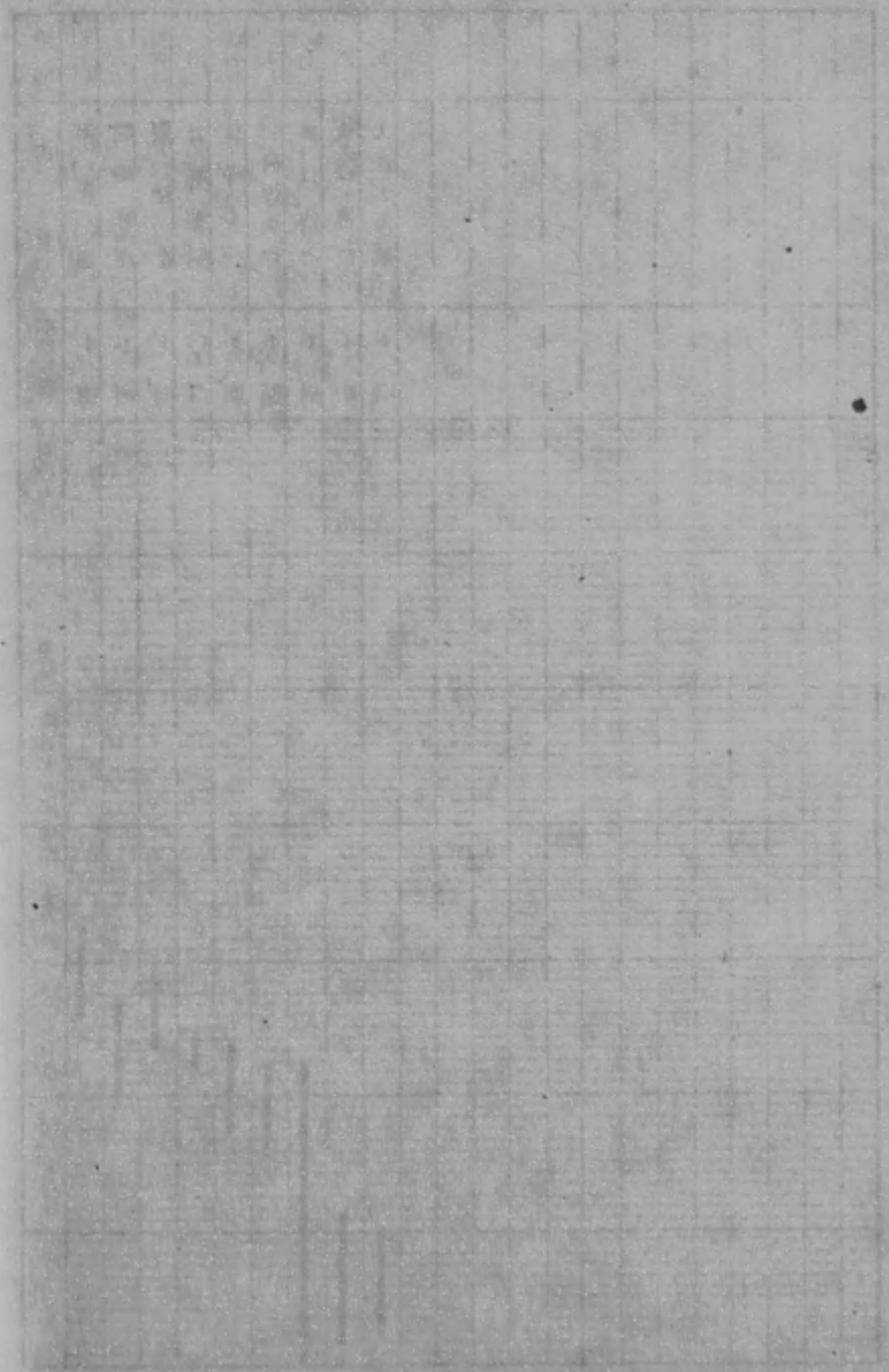
國友光三 (二〇・〇) ○北村久雄 (二四・六) ○高橋(白石)文子 (二一・六)

附表B一 累年教員一覽 (昭和十五年九月末現在)

番號	氏名	奉職年數	明治十三年	同十四年	同十五年	同十六年	同十七年	同十八年	同十九年
一	栗原 逸	不明							
二	高野世民	不明							
三	關 晴一郎	不明							
四	岩崎孝明	〇・四							
五	澁谷英一	不明							
六	三村樸太郎	不明							
七	武貞久吉	不明							
八	大久保 富三郎	不明							
九	大江太吉郎	不明							

附表B二

番號	氏名	奉職年數	明治二〇年	同二二年	同二三年	同二四年	同二五年	同二六年
一〇	坪内要太郎	一・八						
一一	酒井	不明						
一二	柳川謙二	不明						
一三	松浦乙吉	七以上						
一四	岸川文太郎	不明						
一五	後藤	不明						
一六	武井	不明						
一七	黒田繁次	不明						
一八	堀部頼夫	〇・三						
一九	小林太一郎	一・一						
二〇	酒井悦造	不明						
二一	後藤仁壽松	一・二						
二二	山助西郎	不明						
二三	岡保八之助	〇・六						
二四	安田徳治	〇・三						
二五	小寺勝造	〇・九						
二六	山中章	一・六						
二七	櫻井九重朗	〇・五						
二八	林弘雅	〇・六						
二九	飯田善太郎	一・六						
三〇	武井太吉郎	不明						
三一	酒井敬八	一・四						
三二	山下房吉	〇・七						
三三	藤田友太郎	〇・一						
三四	島生忠五郎	〇・七						
三五	吉間文太郎	二・七						
三六	森林友七	〇・四						
三七	溝口頼藏	不明						
三八	藤井源藏	〇・二						
三九	安達房藏	〇・五						
四〇	水澤五十馬	二・九						
四一	内海宗吉	三・二						
四二	藤原留吉	〇・三						
四三	平井戸吉	不明						
四四	岩本祐明	〇・二						



番號	氏名	奉職年數	明治二七年	同二八年	同二九年	同三〇年	同三一年	同三二年	同三三年
一七	黒田繁次	不明							
三〇	武井太吉郎	不明							
四一	内海宗吉	三・二							
四三	平井戸吉	不明							
四五	黒田政策	二・三							
四六	井上平太郎	不明							
四七	東 啓次	不明							
四八	三 澤 榮	一・七							
四九	井上公司	〇・一							
五〇	見 畑 南	一・二							
五一	柳田次郎兵衛	〇・二							
五二	高 雄 子 郎	〇・九							
五三	山村 九 人	不明							
五四	吉原 誠 一	〇・一〇							
五五	清水 源 次	不明							
五六	本庄 介 二 郎	一・〇							
五七	富上 藤 重	六・〇							
五八	友末 正 夫	〇・五							
五九	徳 幸 三	一・二							
六〇	松田 知 弘	三・七							
六一	竹 井	不明							
六二	島田 小 ぎ く	六・一							

氏名	明治二七年	同二八年	同二九年	同三〇年	同三一年	同三二年	同三三年
黒田繁次							
武井太吉郎							
内海宗吉							
平井戸吉							
黒田政策							
井上平太郎							
東 啓次							
三 澤 榮							
井上公司							
見 畑 南							
柳田次郎兵衛							
高 雄 子 郎							
山村 九 人							
吉原 誠 一							
清水 源 次							
本庄 介 二 郎							
富上 藤 重							
友末 正 夫							
徳 幸 三							
松田 知 弘							
竹 井							
島田 小 ぎ く							

附表B四

番號	氏名	奉職年數	明治三十四年	同三十五年	同三十六年	同三十七年	同三十八年	同三十九年	同四〇年
一三	松浦乙吉	七以上							
五七	宮上彌重	六〇〇							
六〇	松田知弘	三〇七							
六二	島田小きく	六〇一							
六三	山本秀吉	〇〇七							
六四	友廣彌一郎	一〇二							
六五	藤本 華	二〇三							
六六	大西こゝろ	一〇一							
六七	幸川曾根	〇〇二							
六八	海江喜作	一〇三							
六九	小高實藏	二五〇							
七〇	森本俊治	二〇九							
七一	細見新次	〇〇五							
七二	林 文四郎	〇〇八							
七三	米岡(井上)かき	二〇一							
七四	宮崎 勝雄	一〇三							
七五	金井作次郎	八〇〇							
七六	松田萬吉	一〇〇							
七七	玉田芳太郎	〇〇七							
七八	島 伊名重	〇〇五							
七九	藤倉 登信	九〇二							
八〇	川口武治	二〇〇							
八一	井上 泰道	〇〇六							
八二	大河原きん	一〇〇							
八三	牛山文の	〇〇四							
八四	石岡つるあ	一〇七							
八五	大原義夫	三〇五							
八六	秋山晴宗	〇〇六							
八七	近藤 政好	二〇四							
八八	藤山 盛	〇〇四							
八九	林 りゆり	四〇一							
九〇	藤田ハル	〇〇五							
九一	藤園行藏	一〇二							
九二	三田村サチ	〇〇一							
九三	久保藤太郎	一〇六							
九四	北村やぶ	四〇六							

番號	氏名	奉職年數	明治三十四年	同三十五年	同三十六年	同三十七年	同三十八年	同三十九年	同四〇年
一四							
一五							
一六							
一七							
一八							
一九							
二〇							
二一							
二二							
二三							
二四							
二五							
二六							
二七							
二八							
二九							
三〇							
三一							
三二							
三三							
三四							
三五							
三六							
三七							
三八							
三九							
四〇							

附表B六

番號	氏名	年齢	大正四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	同十年
一五五	宮本浦田みづい	五・三							
一五六	海田梅次郎	一・三							
一五七	藤江確明	二・一							
一五八	八王寺長一	六・〇							
一五九	角田静太	六・〇							
一六〇	安田悦二	二〇・六							
一六一	金澤はるゑ	六・五							
一六二	川村四郎	三・四							
一六三	柳井覺二	一・二							
一六四	稻毛三子	九・四							
一六五	島津新治	一・〇							
一六六	富士晴子	一・〇							
一六七	高瀬禮之	五・〇							
一六八	滝井きくゑ	一・一							
一六九	松澤静子	三・八							
一七〇	渡邊正彦	三・〇							
一七一	山岡明	〇・七							
一七二	鷺見治喜次	一・七							

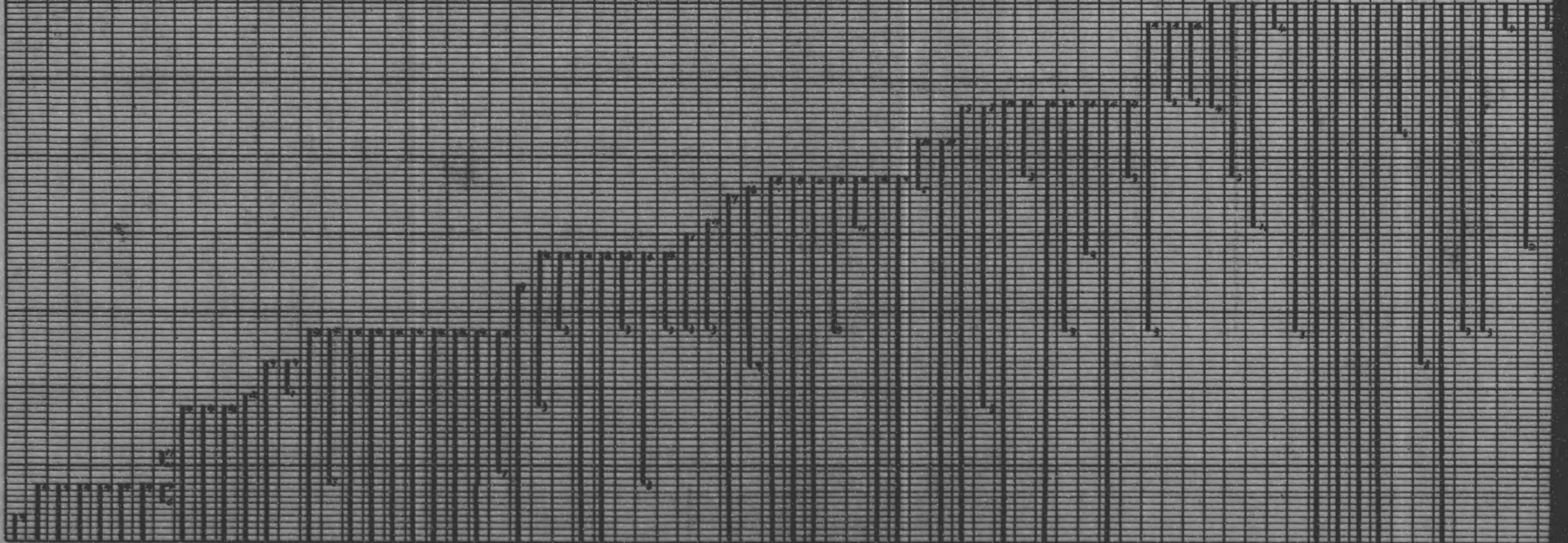
番號	氏名	年齢	大正四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	同十年
一〇五							
一〇六							
一〇七							
一〇八							
一〇九							
一一〇							
一一一							
一一二							
一一三							
一一四							
一一五							
一一六							
一一七							
一一八							
一一九							
一二〇							

附表B六

番號	氏名	奉職年數	大正四年	同五年	同六年	同七年	同八年	同九年	同十年
六九	小高實藏	二五							
九七	朝倉景信	九・二							
八七	近藤政好	二・三・四							
一〇一	橋本ミドリ	八・三							
一〇三	頼廣善三郎	九・五							
一〇四	柳瀬きし	五・七							
一〇九	寺内こむめ	二〇・七							
一一一	宇野幸夫	四・七							
一一七	石井俊治	三・三							
一一九	山下元治	一五・四							
一二〇	森中美郎	一・九							
一二一	菅原八郎	一・〇							
一二二	安井(村尾)みね	二・一							
一二三	松本龍太郎	〇・二							
一二四	木南政次郎	二・二							
一二五	石野昇	一・六							
一二六	長川章三	二五・六							
一二七	赤松佐一	〇・三							
一二八	吉田六太郎	一・六							
一二九	鈴木有教	一・九							
一三〇	玉木政藏	四・七							
一三一	小山(小倉)よし	二・二							
一三二	笠原順太郎	七・二							
一三三	清水ちよ	二・九							
一三四	江上守衛	二・五							
一三五	大橋威知二	〇・六							
一三六	岡金作	〇・三							
一三七	山本喜一	〇・五							
一三八	平野半	八・七							
一三九	森本俊治	二・三							
一四〇	山口梅野	九・二							
一四一	坊垣彌三平	一・〇							
一四二	櫻倉智税	七・九							
一四三	畑利吉	一・二							
一四四	東谷(中島)千代乃	〇・九							
一四五	平松(田中)徳治	一三・二							
一四六	和田徳松	〇・一							
一四七	布施篤	八・〇							
一四八	小山敏子	一・七							
一四九	三間孝平	一・四							
一五〇	上原キタチヨ	一・一							
一五一	古島清太郎	〇・五							
一五二	島田秀三郎	五・〇							
一五三	並河忠藏	六・七							
一五四	岡林福二郎	二・八							
一五五	宮本(浦田)みつい	五・三							
一五六	梅田徳太郎	一・三							
一五七	藤江徳明	二・一							
一五八	八王寺長一	六・〇							
一五九	角田勝太	六・〇							
一六〇	安田悦二	二〇・六							
一六一	金澤はる糸	六・五							
一六二	川村四郎	三・四							
一六三	岡井覺二	一・二							
一六四	福毛三子	九・四							
一六五	島津新治	二・〇							
一六六	富士晴子	二・〇							
一六七	高瀬禮之	五・〇							
一六八	淺井きくよ	一・一							
一六九	松澤勝子	三・八							
一七〇	渡邊正彦	三・〇							
一七一	山岡明	〇・七							
一七二	鷺見治喜次	一・七							

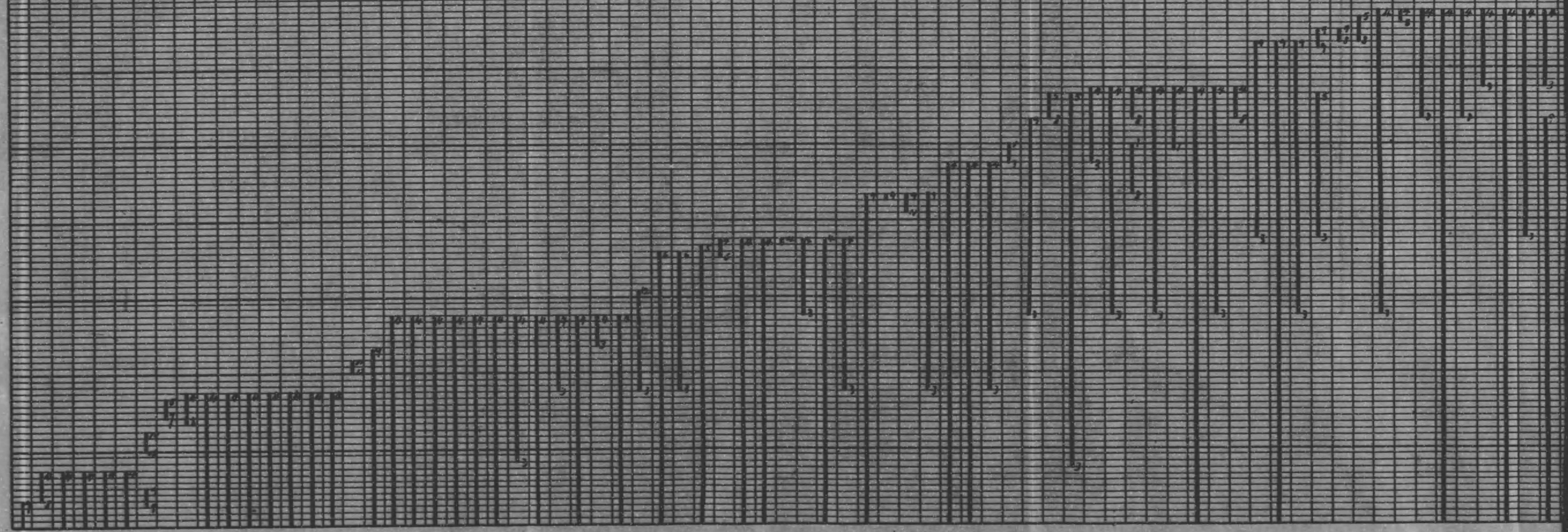
氏名	生年	大正二年	同 一二年	同 一三年	同 一四年	一五(元年)	昭和二年	同 三年
小高實藏	二五・五							
近藤政好	二三・四							
寺内こむめ	二〇・七							
山下元治	一五・四							
石野昇	一一・六							
長谷川章三	二五・六							
小山(小倉)よし	二二・二							
笠松順次郎	七・二							
平野半	八・七							
山口梅野	九・二							
榎倉智悦	七・九							
平松(田中)悦治	一三・二							
布施協	八・〇							
島田秀三郎	五・〇							
並河忠藏	六・七							
岡林福二郎	二・八							
宮本浦田(みつ)い	五・三							
藤江確明	二・一							
八王寺長一	六・〇							
角田静文	六・〇							
安田悦二	二〇・六							
金澤はるゑ	六・五							
川村四郎	三・四							
柳井覺二	一一・二							
稻毛三子	九・四							
島津新治	一一・〇							
富士晴子	一一・〇							
高瀬禮之	五・〇							
淺井きくゑ	一・一							
松澤静子	三・八							
渡邊正彦	三・〇							
鷲見治喜次	一・七							
鷲尾知治	一・〇							
田中健司	一・〇							
三木修一	四・〇							
荒木正次	一・〇							
島田秀人	一七・六							
村井慶治	二・〇							
入江しん	三・〇							
保田唯一	六・五							
彌倉親二	一・〇							
近藤清七	一六・二							
彌田芳子	三・一							
佐藤龍太郎	一七・一							
夏秋誠一	六・一							
中路島雄	〇・八							
谷口浩	七・一							
吉田(平野)亮一	一三・〇							
原田衛一	〇・八							
森川アイ	二・〇							
小林久治	六・五							
福永(三宅)春吾	一一・〇							
坂田よしの	五・〇							
北川たか	二・四							
西村節藏	一六・三							
芦田邦一	一・五							
山下喜代治	一一・三							
栗山誠吉	一・〇							
満田健治	三・〇							
岡本政男	一・〇							
松本幸次郎	一一・〇							
加藤保之	四・〇							
近藤美登	一・〇							
福井シゲ	二・〇							
小林信次	一三・九							
菅原貫治	一・〇							
長島淳一	四・三							
國友光三	一〇・〇							
富井英亮	六・〇							

二二九	二二八	二二七	二二六	二二五	二二四	二二三	二二二	二二一	二二〇	二一九	二一八	二一七	二一六	二一五	二一四	二一三	二一二	二一一	二一〇	二〇九	二〇八	二〇七	二〇六	二〇五	二〇四	二〇三	二〇二	二〇一	一九九	一九八	一九七	一九六	一九五	一九四	一九三	一九二	一九一	一九〇	一八九	一八八	一八七	一八六	一八五	一八四	一八三	一八二	一八一	一八〇	一七八	一七七	一七六	一七五	一七四	一七三	一七二	一七〇	一六九	一六八	一六七	一六六	一六五	一六四	一六三	一六二	一六一	一六〇	一五九	一五八	一五七	一五五	一五四		
新藤健六	岡本須美雄	奥田富美子	中屋源郷	佐野幸雄	佐久間定七	植芝康起	福永ヨシ	伊佐(田邊)勝枝	田淵興四	岡田忠司	足立まつ子	上町(川崎)芳子	北川波流	阪上あい	山本毅一	丸田サメ	勝藤宗三郎	北村久雄	宮田勇	富井英亮	國友光三	長島淳一	菅原真治	小林信次	福井シゲ	近藤美登	加藤保之	松本幸次郎	岡本政男	満田健治	栗山誠吉	山下喜代治	芦田邦一	西村節藏	北川たか	坂田よしの	福次(三宅)省吾	小林久治	森川アイ	原田新一	吉田(平野)亮一	谷口浩	中路島雄	夏秋誠一	佐藤熊太郎	細田芳子	近藤清七	棚倉純二	保田唯一	入江しん	村井慶治	脇田秀人	荒木正次	三木修一	田中健司	鷺尾知治	鷺見治喜次	渡邊正彦	松澤静子	浅井きくゑ	高瀬禮之	富士晴子	島津新治	稻毛三子	柳井覺二	川村四郎	金澤はるゑ	安田悦二	角田静太	八王寺長一	藤江確明	宮本(浦田)みつい	岡村謙二郎
二〇〇	一〇〇	二〇五	五〇〇	二〇〇	一〇〇	五〇〇	〇〇五	五〇九	三〇〇	四〇一	二〇二	九〇七	〇〇五	三〇〇	二〇〇	四〇五	四〇五	一四六	四〇九	六〇〇	一〇〇	四〇三	一〇〇	一三九	二〇〇	一〇〇	四〇〇	一〇〇	三〇〇	一〇〇	一五五	一六三	二〇四	五〇〇	一〇〇	六〇五	二〇〇	〇〇八	一三〇	七〇一	〇〇八	六〇一	一七〇	三〇一	一〇〇	六〇五	三〇〇	二〇〇	一七六	一〇〇	四〇〇	一〇〇	一〇七	三〇〇	三〇八	一〇一	五〇〇	一〇〇	二〇〇	一二〇	六〇〇	六〇〇	二〇一	五〇三	二〇八								



番號	氏名	數年	昭和四年	五年	六年	七年	八年	九年	一〇年
八七	近藤政好	二三・四							
一〇九	寺内こむめ	二〇・七							
一一九	山下元治	一五・四							
一二六	長谷川章三	二五・六							
一三一	小山(小倉)よし	二二・二							
一四五	平松(田中)悦治	一三・二							
一六〇	安田悦二	二〇・六							
一六三	藤井覺二	一一・二							
一六四	稻毛三子	九・四							
一六五	島津新治	一一・〇							
一六六	富士晴子	一一・〇							
一七七	脇田秀人	一七・六							
一八〇	保田唯一	六・五							
一八二	近藤清七	一六・二							
一八四	佐藤龍太郎	一七・一							
一八五	真鍋誠一	六・一							
一八七	谷口浩	七・一							
一八八	吉田(平野)亮	一三・〇							
一九一	小林久治	六・五							
一九二	福永(三宅)智吾	一一・〇							
一九三	坂口よしの	五・〇							
一九五	西村節藏	一六・三							
二〇一	松本幸次郎	一一・〇							
二〇二	加藤保之	四・〇							
二〇五	小林信次	一三・九							
二〇七	長島洋一	四・三							
二〇八	岡友光三	一〇・〇							
二〇九	富井英亮	六・〇							
二一〇	菅田勇	四・九							
二一一	北村久雄	一四・六							
二一二	藤原宗三郎	四・五							
二二三	丸田サタ	四・五							
二二五	阪上あゐ	三・〇							
二二七	上野(川崎)芳子	七・〇							
二二八	足立まゝの	二・二							
二二九	岡田忠司	四・一							
二三〇	田嶋興四	三・〇							
二三一	伊佐田(藤)嗣枝	五・九							
二二三	植芝康起	五・〇							
二二四	佐久間定七	一・〇							
二二五	住野幸雄	二・〇							
二二六	中屋源輝	五・〇							
二二七	奥田富美子	二・五							
二二八	岡本須美雄	一・〇							
二二九	新藤徳六	二・〇							
二三〇	池田(谷上)克己	八・七							
二三一	橋又吉	三・〇							
二三二	山本茂樹	八・〇							
二三三	河原松之助	一・〇							
二三四	安田(栗田)久太郎	一・五							
二三五	高橋(白石)文子	一・六							
二三六	橋詰忠能	一・五							
二三七	高橋一夫	〇・二							
二三八	山田順治	四・〇							
二三九	平田繁	〇・四							
二四〇	北垣さか	〇・二							
二四一	廣岡志穂子	二・二							
二四二	村上邦雄	三・七							
二四三	香川ヨシノ	六・七							
二四五	大西俊太郎	二・七							
二四六	平見秀一	一・三							
二四七	松林眞砂子	三・〇							
二四八	上杉彌三	六・〇							
二四九	藤永高一	〇・〇							
二五〇	進藤田鶴子	三・〇							
二五一	淺野秀英	一・一							
二五二	森本さき	三・〇							
二五三	阿邊末雄	一・〇							
二五四	藤田義光	四・一							
二五五	中野フサ子	〇・四							
二五六	江本益三	二・七							
二五七	駒井健	〇・三							
二五七	宮垣敬司	三・〇							

三〇四	山根俊郎	二・七
三〇三	石和眞男	〇・五
三〇二	上松邦雄	五・六
三〇一	中川英富	二・〇
三〇〇	上野房江	三・一
二九九	東村正久	四・〇
二九八	西村眞尾	〇・九
二九七	片岡房子	〇・三
二九六	池内しづゑ	〇・五
二九五	西岡一郎	二・〇
二九四	元山タミコ	四・〇
二九三	森キヨ	六・六
二九二	玉井憲一	六・六
二九一	西村環夫	四・〇
二九〇	岡ミヨ	六・六
二八九	久保和子	四・〇
二八八	中上貞	〇・四
二八七	平岡武	三・七
二八六	大森康吉郎	七・六
二八五	中村(日高)愛子	四・〇
二八四	兒玉幸子	七・六
二八三	安平吉太郎	四・〇
二八二	中島(富山)あや子	四・〇
二八一	今村至誠	三・〇
二八〇	一瀬潤馬	二・〇
二七九	小園美正	六・〇
二七八	大垣泰治	一・〇
二七七	三宅宗次	三・〇
二七六	森本としゑ	〇・五
二七五	青井寅一	七・六
二七四	津崎武雄	八・四
二七三	平林秀雄	一・〇
二七二	岡田カメコ	三・一
二七一	得田忠	〇・三
二七〇	天野泰善	四・〇
二六九	芥川(持重)源子	三・一
二六八	古市コトエ	〇・一
二六七	北垣永治	一・〇
二六六	玉谷まつゑ	八・六
二六五	廣瀬西	二・〇
二六四	松本功	六・七
二六三	虎澤潤子	〇・一
二六一	川崎チヲ	〇・三
二六〇	小西正雄	二・七
二五九	福田(眞田)美代子	九・六
二五八	山平米蔵	七・〇
二五七	宮垣敬司	三・〇
二五六	野井健	〇・三
二五五	江本益三	二・七
二五四	中野アサ子	〇・四
二五三	藤田義光	四・一
二五二	阿邊末雄	一・〇
二五一	森本さき	三・〇
二五〇	淺野秀美	一・一
二四九	遊藤田鶴子	三・〇
二四八	森永高一	〇・一〇
二四七	上杉彌三	六・〇
二四六	松林眞砂子	三・〇
二四五	平見秀一	一・三
二四四	大西俊太郎	二・七
二四三	香川ヨシノ	六・七
二四二	村上邦雄	三・七
二四一	廣岡志満子	二・二
二四〇	北垣さか	〇・二
二三九	平田繁	〇・四
二三八	山田順治	四・〇
二三七	高橋一夫	〇・二
二三六	櫻詔忠能	一・五
二三五	高橋(白石)文子	一・六
二三四	安田(美田)みさほ	一・五
二三三	河原松之助	一・〇
二三二	山本茂樹	八・〇
二三一	橋又吉	三・〇
三三〇	池田(谷上)克巳	八・七



氏名	生年	昭和二年	同二年	同三年	同四年	同五年
近藤政好	八七					
山下元治	一一九					
長谷川章三	一二六					
小山(小倉)よし	一三一					
安田悦二	一六〇					
脇田秀人	一七七					
近藤清七	一八二					
佐藤熊太郎	一八四					
吉田(平野)亮	一八八					
西村節藏	一九五					
松本幸次郎	二〇一					
小林傳次	二〇五					
國友光三	二〇八					
北村久雄	二一一					
上町(川崎)芳子	二二七					
池田(谷上)克己	二三〇					
山本茂樹	二三二					
高橋(白石)文子	二三五					
香川ヨシノ	二四三					
平尾秀一	二四五					
上杉彌三	二四七					
山平米藏	二五八					
福田(真田)美代子	二五九					
松本功	二六三					
玉谷まつあ	二六五					
芥川(持郎)淑子	二六八					
天野泰壽	二六九					
岡田カメコ	二七一					
津島武雄	二七三					
柳井寅一	二七五					
三宅宗次	二七七					
小園正誠	二七九					
今村至誠	二八一					
中島(富山)あや子	二八二					
安平吉太郎	二八三					
兒玉瑞子	二八四					
中村(日高)愛子	二八五					
大藤壽吉郎	二八六					
平岡家	二八七					
中上貞	二八八					
久保和子	二八九					
岡	二九〇					
西村淡夫	二九一					
玉井憲一	二九二					
森	二九三					
元山	二九四					
西岡一郎	二九五					
西村敏尾	二九八					
東村正久	二九九					
上野房江	三〇〇					
中川英富	三〇一					
上松邦雄	三〇二					
山根俊郎	三〇四					
清水袖子	三〇五					
高山他八郎	三〇六					
前川久之助	三〇七					
田邊省三	三〇八					
安東(今泉)千代子	三〇九					
藤田保之	三一〇					
渡邊(中島)わ子	三一					
竹内龜雄	三二					
田村茂一	三三					
藤田イタ	三四					
芳忠純	三五					
森富美子	三六					
高島義信	三七					
岩城	三八					
岡部	三九					
藤原恒雄	四〇					
松本健	四一					
陣崎武次	四二					
橋野赤壽	四三					
徳美重治	四四					

昭和二年 同二年 同三年 同四年 同五年

三六三	三六二	三六一	三六〇	三五九	三五八	三五七	三五六	三五五	三五四	三五三	三五二	三五〇	三四九	三四八	三四七	三四六	三四五	三四四	三四三	三四二	三四一	三四〇	三三九	三三八	三三七	三三六	三三五	三三四	三三三	三三二	三三一	三三〇	三二九	三二八	三二七	三二六	三二五	三二四	三二三	三二二	三二一	三二〇	三一八	三一七	三一六	三一五	三一四	三一三	三一二	三一〇	三〇九	三〇八	三〇七	三〇六	三〇五	三〇四	三〇三	三〇二	三〇一	二九九	二九八	二九五	二九四	二九三	二九二	二九一	二九〇	二八九
若山カネ子	三木芳枝	香川(横井)壽江	北井みづ	有岡正次郎	下村しづ子	吉岡治一	園山廣徳	大石(太田)八重	小林花榮	竹内忠良	石間観得	柴田しづ	伊藤桂一	田淵昇	中山鶴太郎	村原鏡夫	船野一	近藤千久榮	清瀬(川崎)榮	新居嘉夫	村原(山田)都世	馬城田康子	由利昌一	松岡昭	岸本泰助	須方とし永	高谷久雄	高敏雄	花井たろ永	豊田豊瑞	釣田静江	島崎剛男	山口(小林)キヨ	一色壽恵子	組内武夫	黒川綾子	藤井直次郎	能美重治	柳野水壽	藤崎武次	藤原恒雄	岡部	岩城	高島俊信	藤宮美子	芳忠朝	田村イタ	田村茂一	竹内龜雄	渡邊(中島)つね子	安東(今泉)子代子	田邊省三	高山他八郎	前川久之助	清水袖子	山根俊郎	上松邦雄	中川英富	上野房江	東村正久	西村健尾	西岡一郎	元山タミコ	森キヨ	玉井憲一	西村淡夫	岡	久保和子
〇・五	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六	〇・六	一・四	〇・一〇	一・六	一・六	一・六	一・六	一・六	〇・五	二・六	二・六	二・〇	二・六	二・五	二・〇	二・〇	一・三	三・三	〇・四	一・〇	三・六	三・六	三・六	三・六	三・六	三・六	三・六	三・六	一・七	四・一	二・二	〇・五	〇・五	四・〇	二・〇	四・六	四・六	四・六	二・〇	三・四	二・七	五・六	二・〇	三・一	四・〇	四・〇	六・六	六・六	四・〇	六・六	四・〇	四・〇							

第二十章 教育に関する法規

明治維新以後小學校の設置に逸早く着手したのは、京都府であつたが、それは舊來の寺子屋の面目を改めたに過ぎなかつた。小學校組織の一層發達したのは明治四年に東京府下の六小學校を文部省直轄として教科規則等を定めてからの事である。

我が神戸市に於いて始めて小學校の設けられた當時の教授の方法は右の文部省直轄小學校の教則に準據し課業は京都村の課程表を折衷して定められた。

一、小學校創設當時の法規（明治六年頃本縣）

小學規則（二十一章）

子弟凡ソ八歳ニシテ小學ニ入り、普通學ヲ修メ兼テ大學專門五科ノ大意ヲ知ルヲ要ス

第一章 普通學ヲ修スルニ四項ヲ立ツ之ヲ經トス

一、句 讀 二、語 誦 三、習 字 四、算 術

第二章 四項ヲ修スルニ各順序アリ、五等ヲ分ツ之ヲ緯トス

第五等、第四等、第三等、第二等、第一等

第三章 四經ニ難易アリ、五緯ニ深淺アリ、易ヨリ難ニ就キ淺ヨリ深ニ入ルヲ順トス等ヲ躐ヘ順ヲ紊ルヲ得ス
順序小學課業表ニ具ス

第四章 初等ヨリ漸ヲ以テ進ミ、第一等ニ至テ小學ノ課業畢ル、則チ五科ノ内其ノ才ト其ノ好ミトニ應シ專門

ニ修業セシム

第五章 初入ノ生員貴賤ヲ分タス年齢ヲ序テス、才學ノ有無ヲ論セス皆無等表中ニ加名ス

第六章 無等表ハ入學ノ前後ヲ以テ序列ス

第七章 検査既無ノ證憑ヲ得テ初メテ等級表中ニ加名ス

第八章 四項検査ノ法ヲ設ク

句 讀 音調一失ナク暗誦朗誦 隨失隨時暗誦揚ラス 亡失過多思テ得ス

語 誦 隨問即答一ノ誤脫ナシ 誤脫アリ思テ之ヲ得 誤脫アリ思テ得ス

習 字 字畫端正運筆巧活 字畫端正運筆不活 字畫不正運筆粗笨

算 術 即問即答速算ナシ 運算アリ再勘之ヲ得 運算アリ再勘シテ得ス

第九章 検査ノ法ハ中ヲ得ルヲ相當トス、上ヲ得ル者ハ一等昇進、尙優力ナル者ハ超進トス

第十章 大検査ヲ請ント欲スル者ハ先ヅ其ノ業ノ熟否ヲ試ミ習熟ノ者ニハ内檢ノ印紙ヲ與フ、未熟ノ者ハ更ニ習熟ノ者ハ更ニ習熟セシメテ再ヒ試ム

第十一章 大検査ハ四項習熟者ニ非レハ請ルヲ許サス、内試或ハ小検査ト稱ス

第十二章 既ニ諸項ノ課業習熟シタル者ハ初入タリトモ内試ノ印紙ヲ得レハ數算ノ検査ヲ一時ニ請ルヲ許ス

第十三章 大検査ハ春秋兩度ト定ム、其ノ日ハ知事臨校督學諸教官出席スルコト検査式ノ如ニシテ位次ヲ亂ルハカラス

第十四章 検査人等ノ者ニ證憑ヲ與フルニハ參事督學列席タルヘシ

第十五章 八歳ヨリ十五歳迄ヲ小學生トス、定等ノ課業ヲ修セシムルヲ專要トス

然レトモ其ノ學力ノ優劣ニ因テハ敢テ年齡ヲ以テ限トセス

第十六章 十六歳ヨリハ中學專門科ヲ修スル定期タリト雖モ普通學未タ修セサル者ハ小學課業ヨリ入修モルヲ善トス、然レトモ齡太タ長シテ更ニ小學課業ヲ修ス可カラサル者ハ等外生トシテ其ノ志ニ專ラ修業スルコトヲ許ス

第十七章 課業ノ書、意義解セサレハ讀ミ難キモアリ故ニ皇漢洋三籍ノ日講ヲ以テ等内課讀ノ助ケトス且讀書ヲ解スルノ階梯トス

第十八章 訓話ノ異同ヲ討論シ注疏ノ瑣末ヲ穿鑿シテ徒ラニ光陰ヲ消スルヲ許サス

第十九章 質問ヲ設ケテ疑義ヲ受ク

第二十章 習字ハ雅俗偏習並ニ楷行草、其ノ好ミニ從フヘシ、清書ハ習書式ノ通ニシテ教師ノ可否ヲ取ルヘシ習俗ノ者ニハ既濟ノ印紙ヲ與フ

第二十一章 算術、珠算、各其所好ニ從ヒ之ヲ授ク、時々其ノ教師ノ試ミヲ受クヘシ、習熟ノ者ニハ既濟ノ印紙ヲ與フ

二、學制頒布仰出書

人々自ら其身を立て、其産を治め、其業を昌にして以て其生を遂るゆゑんものは他なし、身を修め、智を開き才藝を長ずるによるなり。而て其身を修め智を開き才藝を長ずるは學にあらざれば能はず、是學校の設あるゆゑんにして、日用常行言語算を初め士官農商工技藝及び法律政治天文醫藥等に至る迄、凡人の營むところの事業あらざるはなし。人よくその才のあるとこに應じ勉勵して之に従事し、しかして後初めて生を治め産を興し、業に昌にするを待べし、されば學問は身を立つるの財本ともいふべきものにして、人たるもの誰か學ばずして可ならんや、夫の道路に迷ひ飢餓に陥り、家を破り身を喪の徒の如きは畢竟不學よりしてかゝる過ちを生ずるなり。從來學校の設ありてより

年を経る事久しと雖も、或は其道を得ざるよりして、人其の方向を誤り、學問は士人以上の事とし、農工商及婦女子に至つては、之を度外におき、學問の何物たるを辨せず、又士人以上の稀に學ぶ者も動もすれば國家のためにすと唱へ、身を立るの基たるを知らずして或は詞章記誦の末に趨り、空理虚談の途に陥り其論高尚に似たりと言へども之を身に行ひ事に施すこと能ざるもの少からず。是即ち沿襲の習癖にして文明普ねからざす、才藝の長ぜずして貧乏破産、喪家の徒多きゆゑんなり、是故に人たるものは學ばずんばあるべからず。之を學ぶにはよろしくその旨を誤るべからず、之に依つて今般文部省に於いて學制を定め、追々教則をも改正し布告に及ぶべきにつき自今以後一般の人民（華士族、農工商及婦女子）必ず邑に不學の戸なく、家に不學の人なからしめん事を期す。人の父兄たるもの宜しく此の意を體認し、其の愛育の情を厚くし其の子弟をして必ず學に從はしめざるべからざるものなり。（高上の學に至つては其の人の才能に任かすといへども幼童の子弟は男女の別なく小學以下に従事せしめざるものは、其の父兄の越度たるべき事）

但從來沿襲の弊、學問は士人以上の事とし、國家のためにすと唱ふるを以て學費及其の衣食の目に至る迄多く官に依頼し之を給するに非れば學ばざる事と思ひ一生を自棄するもの少からず、是皆惑へるの甚しきものなり。自今以後此等の弊を改め一般の人民他事を抛ち自ら奮て必ず學に従事せしむべき様心得べき事。

右之通被仰出條地方官ニ於イテ邊隅小氏ニ至ル迄不洩樣便宜解釋ヲ加ヘ精細申論文部省規則ニ從ヒ學問普及致候様方法ヲ認可施行之事

明治五年壬申七月

太 政 官

三、學 制

制

大中小學區之事

第一章 全國ノ學制ハ之ヲ部一省ニ統フ

第二章 全國ヲ大分シテ八大區トス、之ヲ大學區ト稱シ、每區大學校ヲ置ク

第三章 大學區ノ分別左ノ如シ

第一大區—第八區(府縣名省ク)

第四大區(本縣關係ノ條) 大阪、京都、兵庫、奈良、堺、和歌山、飾磨、豊岡、高知、名東、香川、岡山、滋賀、計二十一縣、大阪府ヲ以テ大學本部トス

第四章 北海道ハ當分第八大學區ヨリ之ヲ管ス、他日別ニ區分スヘシ

第五章 一大學區ヲ分チ三十二中區トシ、之ヲ中學區ト稱ス、區毎ニ中學校一所ヲ置ク、全國八大區ニテ其ノ數二百五十六所トス

第六章 一中學區ヲ分テ二百十小區トシ之ヲ小學區ト稱ス、區毎ニ小學校一所ヲ置ク、一大區ニテ其ノ數六千七百二十所、全國ニテ五萬三千七百六十所トス

第七章 中學區以下ノ區分ハ地方官、其ノ土地ノ廣狹人口ノ疎密ヲ計リ、便宜ヲ以テ郡區市等ニヨリテ之ヲ區分スベシ

第八章 一中區內學區取締十名乃至十二三名ヲ置キ一名ニ小學區二十或ハ三十ヲ分チ持タシムヘシ此ノ學區取締ハ專ラ區內人民ヲ勸誘シテ務テ學ニ就カシメ且學校ヲ設置シ或ハ學校ヲ保護スヘキノ事或ハ其ノ費用ノ使用ヲ計ル等一切其ノ受持所ノ小學區內ノ學務ニ關スル事ヲ擔任シ又一中區內ニ關スル事ハ互ニ相論議シ專ラ便宜ヲ計リ區內ノ學事ヲ進歩セシメンコトヲ務ムヘシ

第九章 學區取締ハ地方官ニ於イテ之ヲ命スヘシ但シ其ノ人名ハ本省督學局ニ届ケヘシ

第十章 學區取締ハ其ノ土地ノ居民名望アル者ヲ選フヘシ、但シ戶長里正等ヲシテ兼ネシムルモ妨ケナシトス

第十一章 學區取締給料ハ當分其ノ土地ノ情態ニヨリテ之ヲ定ムヘシ、此ノ給料ハ土地ヨリ出ス可キモノトス、然レトモ事實止ムヲ得サルモノハ姑ク官ヨリ其ノ幾分ヲ助給スヘシ

第十二章 一般人ノ學ニ就カシメサルモノアラハ委シク其ノ由ヲ學區取締ニ届ケヘシ、若シ子弟六歳以上ニ至リテ學ニ就カシメサルモノアラハ委シク其ノ由ヲ學區取締ニ届ケシムヘシ(自第十三章至第二十章略)

●小 學

第二十一章 小學校ハ教育ノ初級ニシテ人民一般必ス學ハスルハアルヘカラサルモノトス、之ヲ區分スレハ左ノ數種ニ分ツヘシ、然モ均ク之ヲ小學ト稱ス、即チ尋常小學、女兒小學、村落小學、貧人小學、小學私塾、幼稚小學ナリ

第二十二章 幼稚小學ハ男女ノ子弟六歳迄ノモノ小學ニ入ル前ノ端緒ヲ教ルナリ

第二十三章 小學私塾ハ小學教科ノ免狀アルモノ私宅ニ於テ教フルヲ稱ス可シ

第二十四章 貧人小學ハ貧人子弟ノ自活シ難キモノヲ入學セシメントメニ設ク其ノ費用ハ富者ノ寄進金ヲ以テス、是專ラ仁惠ノ心ヨリ組立ルモノナリ仍テ仁惠學校トモ稱ス可シ

第二十五章 村落小學ハ僻遠ノ村落農民ノミアリテ教化素ヨリ開ケケルノ地ニ於イテ其ノ教則ヲ少シク省略シテ教ルモノナリ、或ハ年已ニ成長スルモノモ、其ノ生業ノ暇來リテ學ハシム、是等ハ多ク夜學校アルヘシ

第二十六章 女兒小學ハ尋常小學教科ノ外ニ女子ノ手藝ヲ教フ

第二十七章 尋常小學ヲ分チテ上下二等トス、此二等ハ男女共必ス卒業スヘキモノトス

下等小學教科

字綴—讀並盤上習字 習字—字形ヲ主トス 單語—讀 會話—讀 讀本—解意 修身—解意 書讀—解意盤上
習字 文法—解意 算術—九九數位、加減乘除但洋法ヲ用フ 養生法—講義 地學大意 理學大意 體術。
唱歌ハ當分之ヲ歌ク

上等小學教科

下等小學教科ノ上ニ左ノ條件ヲ加フ

史學 大意 幾何學算數大意 博物學大意 化學 大意

其ノ他形情ニ依リテハ學科ヲ擴張スルタメ左ノ四科ヲ斟酌シテ教フル事アルヘシ

外國語ノ一、二、記簿法、畫學、天球學

下等小學—六歲ヨリ九歲マテ 上等小學—十歲ヨリ十三歲マテニ卒業セシムルヲ法則トス但事情ニヨリ一概

ニ行ハレサル時ハ斟酌スルモ妨ケナシトス

第二十八章 右ノ教科順序ヲ踏マスシテ小學ノ科ヲ授クルモノヲ變則小學ト云フ、但私宅ニ於テ之ヲ教フルモノハ之ヲ家塾トス

第二十九章—第三十七章……中學 第三十八、九章……大學(省略)

●教員

第四十章 小學教員ハ男女ヲ論セス年齡二十歲以上ニシテ師範學校卒業免狀或ハ中學免狀ヲ得シモノニ非サレハ

其ノ任ニ當ルコトヲ許サス

第四十一—四十七章……(省略)

第四十八章 生徒ハ諸學科ニ於テ必ス其ノ等級ヲ踏マシムル事ヲ要ス故ニ一級毎ニ必ス試驗アリ一級卒業スル者ハ

試驗狀ヲ渡シ試驗狀ヲ得ル者ニ非レハ進級スルヲ得ス

第四十九章 生徒學等ヲ終ル時ハ大試驗アリ、小學ヨリ中學ニ移リ中學ヨリ大學ニ進ムノ類、但大試驗ノ時ハ學事

關係ノ人員ハ勿論其ノ請求ニヨリテハ他官員トイヘトモ臨席スルコトアルヘシ(以下百九章迄省略)

四、小學教則

一、明治五年九月八日 頒布 一、明治六年五月十九日改正

左ハ改正サレタルモノ

●小學教則

第一章 小學ヲ分テ上下二等トス、下等ハ六歲ヨリ九歲ニ止マリ上等ハ十歲ヨリ十三歲ニ終リ上下併セテ在學八年トス

第二章 下等小學ノ課程ヲ分チテ八級トス、每級六ヶ月ノ習業ト定メ始メテ學ニ入ル者ヲ八級トシ次第ニ進テ第一級ニ至ル、今其ノ每級課業ノ授ケ方ノ一例ヲ舉テ左ニ示ス、尤一般必行ノモノニハ非ストモ各地其ノ境ニ隨ヒ能ク之ヲ斟酌シテ活用ノ方ヲ求ム可シ

第八級 六ヶ月(一日五時 一週即四日間二十時—課定一六ノ日ヲ除ク以下之ニ倣ヘ)

綴字 一週四時 即一日一時 算術 一週四時

學語讀方 一週四時 算術 一週四時

修身口授 一週一時 國體學口授 一週一時

單語讀誦 一週二時

第三章 上等小學亦八級ニ分ツ每級課程各六ヶ月トス 亦第八級ニ起テ第一級ニ了ル其日課左ノ如シ

細字習字 一週二時 文法 當分缺ク
讀本輪講 一週二時

算 一週四時 書讀作文 一週四時
物理學講義 一週四時

五、小學教師心得——明治六年十二月九日

- 第一條 凡教師タル者ハ學問算筆ヲ教フルノミニ非スシ父兄ノ教訓ヲ助ケテ飲食起居ニ至ルマテ心ヲ用ヒテ教導スヘシ、故ニ生徒ノ中學術進歩セス或ハ平日不行狀ノ徒アラハ教師タルモノノ越度タルヘシ
- 第二條 教師ハ生徒ヲ誘導シテ信從セシメ親切篤實ニ訓誡シ懶惰ノ風ヲ生セシム可ラス
- 第三條 幼稚ノ時ハ總テ教師ノ言行ヲ見聞シテ何事モ善キ事ニ心得ルモノナレハ授業時間ノ他タリトモ不善ノ行狀ヲ示ス可カラス妄語ス可カラス、生徒ヲシテ悪キ友ト交ルヲ禁シ、自身モ亦悪キ人ト交ル可カラス
- 第四條 教師生徒ノ教導ニ於テハ勉勵スト雖モ、其身ニ聊モ不善不正ノ言行アル時ハ生徒モ亦之ニナラフヘシ、故ニ生徒ヲシテ正實ナラシメン事ヲ欲セハ自ラ欺ク事勿レ、生徒ヲシテ賢才ナラシメン事ヲ欲セハ自ラ怠ル事勿レ、自ラ欺キ自ラ怠ル時ハ生徒モ亦之ニ習ヒテ正實賢才ノ者ト爲ル事無カルヘシ
- 第五條 教師ノ訓誡ハ生徒必ス敬ミテ從ハサルヘカラス、故ニ教師ノ心正シカラス、其行ヒ浮薄ニシテ世人ノ侮慢ヲ受ル時ハ生徒モ亦其教師ヲ信セスシテ訓誡ニ從ハサルノミナラス却ツテ我カ惡風ニ濡染スルニ至ル可シ
- 第六條 教師一人ニ生徒凡ソ五十人ヲ受持ツ可シ、但最初二十五人ヲ受持テ六ヶ月ノ後又二十五人ヲ受持ツ可シ
- 第七條 教則ニ揭示スル諸課ハ必ス順序ヲ逐テ合一ニ習熟セシメ務メテ甲乙ナキ様ニ訓導シ同時ニ同級ヲ卒ヘシムヘシ、但シ非常ノ天才アツテ特ニ進歩スル者ト魯鈍ナル者トハ此ノ例ニ非ス
- 第八條 生徒運動場ニ於テ體操ヲナス時ハ必ス之ヲ監守シテ粗暴ノ舉動ヲ制シ生徒ノ怪我ナキ様注意スヘシ

第九條 生徒ヲシテ食ニ就ク時刻ヲ誤ラシメス、順次ニ食卓ニ就カシメ飲食ノ仕方ヲ教ヘ嚴シク談話ヲ禁シ、食終ル時モ初ノ如ク順次ニ立タシム可シ

第十條 授業ノ時刻至レハ一同迅速ナキ様教場ニ至ラシメ順序ニ席ニ就カシム可シ

第十一條 授業中ハ教場ニ人ノ出入スルヲ禁ス可シ。但別段教場ヲ見ン事ヲ乞フモノハ稽古ノ妨ケナキ様之ヲ許ス可シ

第十二條 生徒ヲシテ退校セシム可キ箇條左ノ如シ

一、盜竊ノ心アル者 二、懶惰亂暴ニシテ度々訓誡ヲ加フルモ改メサル者 三、偽計妄語ヲ爲シ度々訓誡ヲ加フル共改メサル者 四、一級卒業試驗ニ落第三度ニ及フ者

第十三條 幼童ハ物ニ倦ミ易ケレハ生徒ノ心ヲ勵マシ稽古ノ進歩スルヲ樂ミトナス様ニ誘導ス可シ

第十四條 校内ニ澡盥ヲ設ケ不潔ノ生徒アラハ指揮シテ洗嗽セシム可シ

六、小學生徒心得

小學教師心得と共に第五一四號兵庫縣達によりて布達さる。明治六年十二年九日

内 容

一條—十七條

第一條 毎朝早ク起キ顔ト手ヲ洗ヒ口ヲ漱キ髪ヲ攝キ父母ニ禮ヲ述ヘ朝食事終レハ學校ニ出ル用意ヲ爲シ先ツ筆紙書物ヲ取揃ヘ置キテ取落シナキ様致スヘシ。但シ出ル時ト歸リタル時ニハ必ス父母ヘ挨拶スヘシ
等ノ如ク起居動作ヲ微ニ入り細ニ亘リテ示セルモノナリ。

七、教 育 令

明治十二年九月學制を廢して教育令が發布せられた學制はその規定が劃一的であり、急進的であつて地方の實際に適合せず、之を勵行する事が困難であつたから政府は唯々大綱のみを規定し、細末の事は地方に委せると言ふ方針で此の教育令を發したのであつた。

教育令

第一、二條 (略)

第三條 小學校ハ普通ノ教育ヲ兒童ニ授クル所ニシテ其學科ヲ讀書、習字、算術、地理、歴史、修身等ノ初歩トス土地ノ概況ニ隨ヒテ算畫、唱歌、體操等ヲ加ヘ又物理、生理、博物等ノ大意ヲ加フ殊ニ女子ノタメニハ裁縫等ノ科ヲ設ク可シ (第四條 第九條略)

第十條 町村内ノ學校事務ヲ管理セシメンカタメニ學務委員ヲ置クヘシ (第十二條略)

第十三條 凡兒童六才ヨリ十四才ニ至ル八年ヲ以テ學齡トス

第十四條 凡兒童學齡間少クトモ十六ヶ月ハ普通教育ヲ受クヘシ

第十七條 學校ヲ設置スルノ資力乏シキ地方ニ於テハ教員巡回ノ方法ヲ設ケテ兒童ヲ教授セシムルコトヲ得ヘシ

第四十六條 凡學校ニ於テハ生徒ニ體罰ヲ加フ可ラス

第四十七條 生徒試驗ノ時ハ父母或ハ後見人等其學校ニ來觀スル事ヲ得ヘシ

八、本縣布達小學教則

第一章 通 則

第一條 小學校ハ一般普通ノ學科ヲ教導スル所ナリ

第二條 學科ヲ分テ二等トシ下等小學ノ生徒ハ滿六年ヨリ滿九年ニ至リ上等小學ノ生徒ハ滿九年ヨリ滿十二年ニ終リ

上下合シテ在學六年トス、但シ學齡外タリトモ志願ノ者ハ入學ヲ許ス

第三條 上下二等ノ學科ヲ各六級ニ分テ每級六ヶ月ノ修業ト定メ第六級ヨリ試驗ヲ受ケテ滿次第一級ニ進ムヲ法トス

第四條 修業ノ時間ハ一日五時間ト定メ十一月一日ヨリ三月三十一日ヲ限リ午前九時ヨリ午後三時ニ至ル、四月一日ヨリ六月三十日及九月一日ヨリ十月三十一日限リ午前八時ヨリ午後三時ニ至ル七月一日ヨリ八月三十一日限リ午前七時ヨリ正午十二時ニ至ル

第五條 學年ハ八月二十一日ニ始マリ翌年七月三十一日ニ終ル、八月二十一日ヨリ二月十五日マテヲ前半期トシ二月十六日ヨリ七月三十一日マテヲ後半期トス

第六條 年中休業ヲ定ムル左ノ如シ

日曜日、土曜日午後	孝明天皇祭	一月三十日
紀元節	春季皇靈祭	三月三十一日
神武天皇祭	夏期休業	
秋季皇靈祭	神嘗祭	十月十七日
天長節	新嘗祭	十一月二十三日
冬季休業		十二月二十六日ヨリ一月十日ニ至ル

右ノ外臨時休業ハ時々揭示スヘシ

第二章 試驗規則

第一條 試驗ヲ分テ三種トス 一ヲ月次試驗、一ヲ定期試驗 一ヲ全科卒業試驗トス

明治十四年六月十八日

文部省省達第十九號

「小學教員ノ良否ハ普通教育ノ弛張ニ關シ、普通教育ノ弛張ハ國家ノ隆替ニ係ル、其ノ任タル重且大ナリト
言フヘシ云々」

兵庫縣之ニ依リ教員心得布達(時日 明治十五年六月)

九、改正教員令

第一條第二條(省略)

第三條 小學校ハ普通ノ教育ヲ兒童ニ授ケル所ニシテ其ノ學課ヲ修身讀書習字算術地理歴史等ノ初歩トス

土地ノ情況ニヨリ晝畫唱歌體操等ヲ加ヘ又物理生理博物等ノ大意ヲ加フ殊ニ女子ノ爲ニハ裁縫ノ科ヲ設
クヘシ但シ止ムヲ得サル場合ニハ修身、讀書、習字、算術、地理、歴史ノ中地理歴史ヲ減スルコトヲ得

第九條 各町村ハ府知事縣令ノ指示ニ從ヒ獨立或ハ聯合シテ其ノ學齡兒童ヲ教育スルニ足ルヘキ一箇若シクハ數
箇ノ小學校ヲ設置スヘシ但シ本文小學校ニ代ルヘキ私立小學校アツテ府知事縣令ノ認可ヲ經タル時ハ別
ニ設置セサルモ妨ナシ

第十條 各町村ハ學務ヲ幹理セシメンカタメニ小學校ヲ設置スル獨立或ハ聯合ノ區域ニ學務委員ヲ置キ戸長ヲモ
ツテ其ノ員ニ加フヘシ、但シ人員多寡給料ノ有無及其ノ額ハ區町村會之ヲ評決シ府縣令ノ認可ヲ經ヘシ

第十一條 學務委員ハ町村人民其ノ定員ノ二倍モシクハ三倍ヲ薦舉シ府知事縣令其ノ中ニ就テ之ヲ選任スヘシ、但
シ薦舉ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第十三條 凡兒童六年ヨリ十四年ニ至ル八箇年ヲ以テ學齡トス

第十四條 學齡兒童ヲ就學セシムルハ父母後見人等ノ責任タルヘシ

第十五條

父母後見人等ハ其ノ學齡兒童ノ小學科三ヶ年ノ課程ヲ卒ラサル間已ムヲ得サル事故アルニアラサレハ少
ナクトモ毎年十六週以上就學セシメサルヘカラス又小學科三ヶ年ノ課程ヲ卒リタル後ト雖モ相當ノ理由
アルニアラサレハ毎年就學セシメサルヘカラス、但シ就學督責ノ規則ハ府知事縣令之ヲ起草シテ文部卿
ノ認可ヲ經ヘシ

第十六條

小學校ノ學期ハ三ヶ年以上八ヶ年以下タルヘク授業日數ハ毎年三十二週日以上タルヘシ、但シ授業時間
ハ一日三時ヨリ少ナカラス六時ヨリ多カラサルモノトス

第十七條

學齡兒童ヲ學校ニ入レス又巡回授業ニ依ラスシテ別ニ普通教育ヲ授ケントスルモノハ郡區長ノ認可ヲ經
ヘシ、但シ郡區長ハ兒童ノ學業ヲ其ノ町村ノ小學校ニ於テ試驗セシムヘシ

第十八條

小學ヲ設置スル資力ニ乏シクシテ巡回授業ノ方法ヲ設ケ普通教育ヲ兒童ニ授ケントスル町村ハ府知事縣
令ノ認可ヲ經ヘシ

第二十三條

小學校ノ教則ハ文部卿頒布スルトコロノ綱領ニ基キ府知事縣令土地ノ情況ヲ量リテ之ヲ編制シ文部卿ノ
認可ヲ經テ管内ニ施行スヘシ、但府知事縣令施行スルトコロノ教則ニ準據シ難キ場合ゾリテ之ヲ酌量増
減セントシ府知事縣令之ヲ許可セントスル時ハ其ノ意見ヲ附シ文部卿ノ認可ヲ經ヘシ

第二十七條

凡學事ニ供スル寄附金等ハ其ノ寄附人ヨリ指定セシ目途ノ外ニ支消スルコトヲ得ス

第三十三條

各府縣ハ小學校教員ヲ養成センカタメニ師範學校ヲ設置スヘシ

第三十七條

教員ハ男女ノ別ナク年齢十八歲以上タルヘシ、但品行方正ナルモノハ教員タルコトヲ得ス

第四十二條

凡學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルコトヲ得ス、但小學校ニ於テハ男女教場ヲ同クスルモ妨ケナシ

第四十三條

凡學校ニ於テ授業料ヲ收ムト收メサルトハ其ノ便宜ニマカスヘシ

- 第四十四條 凡兒童ハ種痘又ハ天然痘ヲ經タルモノニアラサレハ入學スルコトヲ得ス
- 第四十六條 凡學校ニ於テハ生徒ニ體罰ヲ加フヘカラス
- 第四十七條 生徒試驗ノ時ハ父母或ハ後見人等其ノ學校ニ來觀スルコトヲ得ヘシ

明治十四年五月四日小學校教則綱領が發布された。これは改正教育令の副則と見るべきものであつてこれによつて教育に關する法規が略整ひ、明治十八年まで行はれた。

一〇、小學校教則綱領（小學校ノ分）

- 第一條 小學校ヲ分チテ初等中等高等ノ三等トス
- 第二條 小學校初等科ハ修身讀書習字算術ノ初等及唱歌體操トス但シ唱歌ハ教授法ノ整フヲマテテ之ヲ設クヘシ
- 第三條 小學中等科ハ小學初等科ノ修身讀書習字算術ノ初歩及唱歌體操ノ續ニ地理歴史圖畫博物物理ノ初歩ヲ加ヘ殊ニ女子ノタメニハ裁縫ヲ設クルモノトス
- 第四條 小學高等科ハ小學中等科ノ修身、讀書、習字、算術、地理、圖畫、博物ノ初歩及唱歌、體操、裁縫ノ續ニ化學、生理、幾何、經濟ノ初歩ヲ加ヘ殊ニ女子ノタメニハ經濟等ニ換ヘ家事經濟ノ大意ヲ加フルモノトス
- 第五條 小學校ノ區分ハ前三條ノ如ク定ムト雖モ土地ノ情況、男女ノ區別等ニ因ツテハ其ノ學課ヲ増減スルコトヲ得、但修身讀書習字及算術ハ之ヲ缺クコトヲ得ス

●學期授業ノ日及時

- 第六條 小學校ノ學期ハ初等科及中等科ヲ各三ヶ年トシ高等科ヲ二ヶ年トシ通シテ八ヶ年トス
- 第七條 小學校ニ於テハ日曜日、夏季冬季休日及大祭日、祝日等ヲ除クノ外授業スヘキモノトス
- 第八條 小學校授業ノ時間ハ一日五時ヲ以テ限度トス

第九條 前三條定ムル所ノ學期授業ノ日及時ハ土地ノ情況ニ因リ伸縮スルコトヲ得ヘシト雖モ學期ハ初等科ニ於テハ三箇年ヲ下ルヘカラス各等科合シテ八ヶ年ニ過クヘカラス授業ノ日ハ一年三十二週日ヲ下ルヘカラス又授業ノ時間ハ一日三時ヲ下ルヘカラス六時ニ過クヘカラス（第十條ヨリ第二十五條マテ省略ス。）

第二十六條 土地ノ情況ニ依リ農業ノ初歩ヲ加フル時ハ農具ノ名稱、用法、肥料ノ種類効用、禾穀蔬菜果實ノ性質、栽培法、養蠶培桑ノ法及家畜魚鳥ノ飼養法等凡農家ニ緊要ノ事項ヲ授クヘシ、工業ノ初歩ヲ加フル時ハ機械ノ効用汽水風力利用ノ一斑工業ノ經濟及其地方ニ適切ノ製造物ノ品性等凡工業ニ緊要ノ事項ヲ授クヘシ、商業ノ初歩ヲ加フル時ハ簿記、保險、銀行、郵便電信、陸運、水運、貨幣、手形等凡商家ニ緊要ノ事項ヲ授クヘシ

第二十七條 小學各等科程度ハ前十七條ノ如ク定ムト雖モ土地ノ情況ニ因テハ之ヲ斟酌スルコトヲ得

- 一、教則ノ組織以上三章掲クル所ノ例ニ適セサルモノハ其ノ近キ所ニ依ツテ初等科中等科高等科ノ別ヲサテヘシ

明治十四年六月十八日文部省は省達條十九號を以て小學校教員心得を示達し「小學校教員の良否は普通教育の弛張に關し普通教育の弛張は國家の隆替に係はる其の任たる重且大なりと謂ふべし云々」より説起して懇篤に其の心得を論じた、よつて本縣に於ては其の翌年六月教員心得を布達して職務に關する規定を示した。

一一、本縣小學校規則

生徒試業のことは古く明治五年の學則に現れ爾來久しき間席次の上下より年級の進否に至るまで悉く試験によつてゐたが兒童の成績を知らんがため一定の期に於て試験を行ふのは心身の發育に害があるとの議論が起り遂に教授上の参考と認定の材料との狭範圍に限らるゝに至り明治二十四年小學校教則大綱第二十一條によつて「小學校に於て兒童

の學業を試験するは専ら學業の進歩及習熟の度を檢定して教授上の參考に供し又は卒業を認定するを以て目的とすべし」と規定された。

然るに明治三十三年小學校令施行規則には「小學校に於て各學年の程度の修了若しくは全教科の卒業を認むるには別に試験を用ふることなく兒童平素の成績を考査して之を定むべし」となつて進級卒業と何等關係がないやうになつた。けれども従來の試験制度なるものが如何に重要視されたかを沿革誌の一頁に留めて増減を惜むのも亦徒爾の業でないと思ひ本縣に於ける最初の布達たる明治十五年兵庫縣小學校生徒試験規則中より之を摘録する。

一、兵庫縣小學校生徒試験規則

イ、試験規則

- 第一條 試験ヲ分チテ月次試験定期試験卒業試験ノ三トス
- 第二條 月次試験ハ毎月末ニ之ヲ施行シ生徒該月間ニ學習セシ所ノ學習ヲ試験以テ其ノ優劣ヲ判シ級中ノ座次ヲ進退スルモノトス
- 第三條 定期試験ハ前後二期ノ終リニ之ヲ施行シ生徒該期間ニ學習セシ所ノ學科ヲ試験シ以テ級ノ進否ヲ定ムルモノトス
- 第四條 卒業試験ハ初等中等若シクハ高等科ノ第一級ヲ卒業セシ生徒ニ之ヲ施行シ該生徒等ノ間ニ屢修セシ所ノ學業ヲ試験シ以テ卒業ノ當否ヲ定ムルモノトス
- 第五條 修身讀方ノ二學科ハ一名ツ、之ヲ試験シ其ノ他ノ學科ハ卓凡ヲ並列シテ一凡ニ一名ツ、就カシメ一齊ニ之ヲ試験スヘシ、但試験場或ハ卓凡ノ都合ニヨリ一凡ニ二名ヲ就カシムル時ハ凡右凡左ノ二列ニ分チ凡右ニハ初等第四級生ヲ就カシメテ算術ヲ試験シ凡左ニハ中等第三級生ヲ就カシメテ習字ヲ試験スル等ノ

如ク特ニ左右生徒ノ等級及試験學科ヲ異ニスヘシ

- 第六條 月次試験ノ際缺席セシモノハ其ノ級ノ席末ニ置ク者トス、但缺席二名以上アル時ハ前月ノ座席ニ從フ
- 第七條 定期試験若クハ卒業試験ニ缺席セシ者又ハ試験中途ニシテ缺席セシ者試験後一箇月以内ニ出席スル時ハ特ニ之ヲ施行シ其ノ他ハ總テ元級ニ止メ其ノ級ノ席首ニ置クモノトス、但シ元級ニ止マル者二名以上アル時ハ前月次試験ノ座次ニヨル
- 第八條 定期試験及第ノ者ニハ第一號書式ノ證書ヲ授與シ卒業試験及第ノ者ニハ第二號書式ノ證書ヲ授與スヘシ
- 第九條 卒業試験ノ際優等ノ者ニハ縣廳ヨリ第三號書式ノ褒狀ヲ授與スヘシ、但定期試験ノ際優等ノ者ニハ郡區役所ヨリ賞品若クハ褒狀ヲ授與スヘシ
- 第十條 定期試験若クハ卒業試験ニ於テ平均點九十六點以上百點ヲ得タル者ヲ一等トシ九十一點以上九十五點以下ヲ得タル者ヲ二等トス
- 第十一條 定期試験若シクハ卒業試験ヲ受ケタル生徒ハ試験畢リシ翌日ヨリ三日間休業セシム
- 第十二條 各試験ノ節生徒ノ父兄後見人親戚ハ勿論何人ヲ論セス衆庶ノ參觀ヲ許スヘシ
- 第十三條 都テ試験畢リタル後直チニ第四、五、六號書式ノ採點表ヲ製シ其ノ校內若シクハ門前ニ揭示スヘシ
- 第十四條 月次試験ハ該校教員之ヲ執行スヘシ
- 第十五條 試験及卒業試験ハハ試験教員之ヲ執行スヘシ
- 第十六條 試験問題ハ月次試験ヲ除ク外總テ試験教員協議ノ上之ヲ選定スヘシ、但時宜ニヨリ臨監ノ吏員ニ於テ之ヲ改正シ或ハ更ニ問題ヲ出スコトアルヘシ
- 第十七條 總テ證書ハ學務委員立會ノ上該校校長或ハ首座教員之ヲ授與スヘシ

第十八條 定期試験ノ際ハ學務擔當書記學務委員及巡回調導之ニ臨監スヘシ
第十九條 卒業試験ノ際ハ學務課員學務擔當書記學務委員及巡回調導之ニ臨監スヘシ、但定期試験ノ節タリトモ學務課員臨席スルコトアルヘシ

第二十條 定期試験前區役所ニ於テハ試験着手ノ日限ヲ定メ部内各小學校ニ達スヘシ
第二十一條 定期試験及卒業試験ハ各小學校ニ於テ施行スルヲ法トスト雖モ時宜ニヨリ一校ニ數校ノ生徒ヲ招集シ之ヲ施行スルコトアルヘシ

第二十二條 定期試験前各小學校長或ハ首坐教員ハ第七號書式ニ準シ受験生徒調査表並第八號書式ノ全科卒業受験生徒名簿ヲ製シ學務委員ニ出スヘシ

第二十三條 學務委員ハ前條ノ表簿ヲ一纏シ別ニ學校ニ入ラスシテ普通教育ヲ受ケタル受験生徒調査表第九號書式並ニ其卒業受験生徒名簿第十號書式ヲ製シ定期試験前之ヲ所轄區役所ニ出スヘシ

第二十四條 學務委員ハ學校ニ入ラスシテ普通教育ヲ受ケタル受験生徒名簿第十一號書式ヲ製シ試験前之ヲ其ノ他ノ町村立小學校ニ送付スヘシ

第二十五條 定期試験後一週間以内ニ試験教員ハ受験生徒ノ優等及第落第ヲ調査シ第十二號式ノ試験表並ニ全科卒業生徒名簿ヲ製シ學務委員ニ出スヘシ

第二十六條 學務委員ハ學區内各小學校ノ定期試験表並ニ全科卒業生徒ノ名簿ヲ製シテ郡區役所ニ出スヘシ
第二十七條 郡區役所ニ於テハ第十三號書式ニ準シ部内各小學校ノ定期試験表並ニ第十四號書式ノ卒業生徒姓名簿ヲ製シ縣廳ニ開申シ且部内ニ報告スヘシ

第二十八條 縣廳ニ於テハ各郡區ノ試験表ヲ統計シ管内小學校定期試験表並ニ卒業試験表ヲ製シ之ヲ報告スヘシ

第二十九條 定期試験ハ總テ後章ノ試験ニヨリ問題ヲ選定シテ之ヲ施行スルモノトス

ロ、試験採點法

第三十一條 定期試験ニ於テハ各等科一學課ニ與フル點數ヲ百點即チ定點トシ各科採點ノ方法ヲ示ス

- 一、修身 百點 一、讀方 百點 一、書取 百點
- 一、作文 百點 一、習字 百點 一、筆算、珠算 各百點
- 一、圖畫 百點 一、幾何 百點 一、裁縫、家事、經濟 各百點

第三十二條 一、地理、歴史、博物、物理、生理、化學、經濟、農業、商業、工業 各百點
定期試験ニ及第ヲ定ムルニハ前條ノ各學科及品行ニ於テ得タル點數ハ月次試験ニ於テ得タル平均點ヲ合算シ平均點六十點以上ヲ得タル者ハ進級セシメ其以下ハ元級ニ止マルモノトス、但平均點六十點以上ナルモノ一科零點ノモノハ落第ス

第三十三條 月次試験ニ於テ級中ノ坐次ヲ判スルニハ其平均點ノ多寡ヲモツテ之ヲ定ムルモノトス
第三十四條 卒業試験ニ於テ卒否ヲ判スルニハ各學科ニ於テ得タル點數ト定期試験平均點トヲ合算シ平均點六十點以上ヲ得タル者ハ卒業セシメ其以下ハ尙之等第一級ニ止メ該等ノ諸科ヲ溫習セシムルモノトス

第三十五條 月次試験採點法ハ定期試験ト異ナルコトナシト雖モ唯課題ノ數及定點ヲ半數トスル差異アルノミ
第三十六條 總テ點數ヲ合計スルニアタリ小數ヲ生ズル時ハ四捨五入ノ法ニヨルモノトス

ハ、試験教師選舉法

第三十七條 郡區役所ニ於テハ每定期試験ニ先チ部内ヲ數區ニ分畫シ之ヲ試験教師選舉區トシ一區域毎ニ試験教師五名乃至三名ヲ選舉スヘシ

第三十八條 郡區役所ニ於テ六十校乃至五校ヲ目的トシテ試験教師選舉區域ヲ定メ其區畫ヲ部内各小學校ニ達スヘシ
第三十九條 各小學校ニ於テハ第三十八條ノ達ヲ得タル後三日以内ニ其區内各小學校教員第三十七條ニ揭示セル定數ノ試験教師ヲ互選シ其投票ヲ學務委員ニ出スヘシ
第四十條 學務委員ハ第三十九條ノ投票ヲ受取リタル後速ニ選舉人立會ノ上之ヲ開封シテ其當選人ノ姓名ヲ所轄郡役所ニ届出スヘシ

第四十一條 投票同數ナル時ハ抽籤ヲ以テ定ムヘシ

第四十二條 郡區役所ニ於テハ學務委員ヨリ届出タル當選人ノ姓名並ニ員數等ヲ調査シ其當選人ノ姓名ヲ部内各小學校ニ達スヘシ

二、試験者心得

第四十三條

試験ハ總テ生徒平日ノ品行動情學業ノ進否優劣ヲ驗シ以テ進退黜陟ヲ行フモノナレハ生徒一身上ニ關涉スル大事ナリ故ニ務メテ鄭重精密ニ之ヲ行ヒ苟モ粗略ノ處置ナルヘカラス

第四十四條

月次、定期、卒業ノ三試験ヲ相比スレハ各輕重アリト雖モ其ノ點ノ如キハ彼是相連帶シテ同一ノ關係アルモノナレハ試験者ナル者宜シク茲ニ注意スヘシ

第四十八條

都テ試験答記ト批評採點スル際ハ試験教師協議ノ上之ヲ評シ其ノ答記ハ生徒ニ返附スヘシ

三、教員心得

第一條

文部省達シ教員心得ヲ遵奉シ及校長或ハ首席教員ノ指示ニ從ヒ其ノ受持生徒ヲ教授スヘシ

第二條

授業時間三十分前必ス出勤ス可シ、若シ病氣其他事故アリテ遅刻或ハ缺勤スル時ハ授業時間前斷書ヲ出スヘシ、但シ出席スル時ハ直ニ出席簿ニ捺印ス可シ

第三條

父母看病ニヨル歸省等ニテ止ムヲ得ス變動三日以上ニ及フヘキ見込アルモノハ豫メ區長ヘ申請スヘシ、但シ親戚ノ忌服ニ罹ル時ハ區長ヘ開申スヘシ

第四條

病氣ニ罹リ缺勤スル時ハ一日タリト雖モ届出ス可シ若シ三日以上ニ及フヘキ見込アルモノハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘテ學務委員ヘ届出ス可シ

第五條

初等科受持教員ハ授業中椅子ニ倚ルヲ許サス、但シ中等科以上タリト雖モ、多數ノ生徒ヲ教授スル場合ニ於テハ椅子ニ倚ルヲ許サス

第六條

授業時間中ハ安ニ教場ヲ離ルヘカラス

第七條

書籍器械等授業ニ差支ナキ様豫メ注意スヘシ

第八條

毎科就業ノ前後受持生徒ヲシテ必ス遊歩場ニ整列セシメ號令ヲ以テ進退ス可シ

第九條

生徒ヲ教場ニ出入スルニハ受持教員必ス之ヲ先導シ生徒ヲシテ教場ノ戸ヲ開閉セシム可カラス

第十條

生徒ノ遊歩時間ハ教員必ス之ヲ保護監督スヘシ

第十一條

月次試験ハ毎月七、八ノ兩日ニ施行シ其ノ問題ハ豫メ擔當教員ノ調査ヲ乞ヒ然ル後試験ヲ施行シ該試験了ルトキハ其ノ問題ヲ擔當教員ヘ出ス可シ但シ二月限り二十五、二十六ノ兩日ヲ以テシ若シ休日ニ當ルトキハ其前日施行スヘシ

第十二條

淨書直シ及品行簿課程日誌ノ記載ハ必ス授業時間外ニ於イテスヘシ

第十三條

受持教員ニ於テ調製スヘキ諸表簿ハ必ス期限ニ後ル可カラス

第十四條

受持生徒二週間以上缺席スル者アル時ハ必ス其都度擔當教員ヘ通知スヘシ

第十五條

教場ヘハ科業用書籍器械ノ外、書籍其他諸種ノ物品ヲ携帯ス可カラス、但シ授業上參考ニ供スル書籍ハ此

ノ限ニ非ス

- 第十六條 就業時間至レハ直ニ教場ニ就クハ勿論タリト雖モ止ムヲ得サル事故アリテ教場ニ就クヲ得サル事故アリテ
教場ニ就クヲ得サル時ハ擔當教員ノ許可ヲ得ヘシ
- 第十七條 各教場ヘハ必ス授業時間表ヲ貼布スヘシ
- 第十八條 教場ニ於テハ雨衣頭巾手套ハ勿論其他異形ノ衣服ヲ用フ可カラス

一四、生徒心得附生徒罰則

- 第一條 校舎中ニ於イテ高聲ヲ發シ或ハ疾走ス可カラス第二條 蹴足ニテ遊歩場ニ出ツヘカラス
- 第三條 遊歩場ニ於イテ危險ノ遊戲ヲ爲ス可カラス
- 第四條 授業時間來レバ遊歩場ニ整列スヘシ
- 第五條 喫飯ノ節ハ五ニ談話スヘカラス
- 第六條 教場ニ在テハ雨衣頭巾手套ヲ用フ可カラス
- 第七條 他人ヲ誹謗シ及衣服辨當等ノ好惡ヲ評スヘカラス
- 第八條 書籍器械ヲ始メ履傘等ニ至ルマテ常ニ之ヲ整置シ猥リニ他人ノ物品ニ手ヲツク可カラス
- 第九條 机案ヲ清潔ニシ紙屑等ヲ坐傍ニ棄擲ス可カラス
- 第十條 教場ニ在テハ常ニ身體ヲ端正ニシ款側ス可カラス
- 第十一條 學校ノ昇降其他出入ニハ父母尊長ニ敬禮ヲ行フヘシ
- 第十二條 故ナク始業時間ニ後ル可カラス
- 第十三條 授業中私ニ談話シ且教師ノ許可ヲ待タスシテ猥リニ言論ヲ發ス可カラス

- 第十四條 金錢及其ノ他玩弄物ヲ携帯ス可カラス
- 第十五條 遊歩時間教師ノ許可ヲ得スシテ教場ニ入ル可カラス
- 第十六條 私ニ書籍、筆、紙等ノ貸借ヲナス可カラス
- 第十七條 喫飯ノ始終ハ監督ノ命ヲ待ツヘシ
- 第十八條 授業中猥リニ席ヲ離ル可カラス
- 第十九條 課業必要ノ物品ヲ忘失ス可カラス
- 第二十條 相互ニ口論シ或ハ人ヲ罵言シ又ハ虚言ヲ吐ク可カラス
- 第二十一條 戸障子等ヲ亂打ス可カラス
- 第二十二條 故ナク缺席ス可カラス
- 第二十三條 書籍器械並ニ品行簿等ヲ汚穢毀損ス可カラス
- 第二十四條 校内ニ於テ瓦石類ヲ擲ツ可カラス
- 第二十五條 戲ニ他人ノ物品ヲ藏匿ス可カラス
- 第二十六條 辨當ノ外食物ヲ持參ス可カラス
- 第二十七條 校外ニ出テ遊歩ス可カラス
- 第二十八條 他人ノ衣類或ハ物品ヲ毀損ス可カラス
- 第二十九條 塙壁屋上樹木ニ上リ又ハ花實等折ル可カラス
- 第三十條 途上ニテ食物ヲ食ス可カラス
- 第三十一條 途上ニテ危險ノ遊戲ヲナス可カラス

- 第三十二條 校内及途上ニテ朋友ハ勿論犬猫等ヲ毆打ス可カラス
- 第三十三條 諸揭示ヲ破ル可カラス
- 第三十四條 校内ノ諸機械ヲ毀損シ及ビ墻壁等ニ戯書ス可カラス
- 第三十五條 教師其ノ他長上ヲ侮辱ス可カラス
- 第三十六條 總テ人ニ傷害ヲ加フル所爲アル可カラス

生徒罰則

- 第一條 罰則ハ總テ受持教員ニ於テ行フモノトス
- 第二條 生徒ヲ懲戒スル處ノ方法ヲ分テ譴責貶席ノ二項トス
 - 第一項 譴責ハ終業後其ノ犯由ヲ糺シ情實ヲ詳ニシ之ヲ譴責シ以テ後來ヲ戒諭シ、其ノ所犯ノ重キモノハ兼テ品行點ヲ減殺スルモノトス
 - 第二項 貶席ハ其ノ犯由ヲ糺シ事情ノ輕重ニ應シ三日以上十日以下席順ヲ最末ニ貶シ其ノ事由ヲ記シテ處罰中之ヲ控所ニ揭示シ兼テ其ノ品行點ヲ減殺スルモノトス
- 第三條 生徒心得第一條ヨリ第十二條ノ數條ヲ犯シタルモノハ譴責ニ止マルモノトス
- 第四條 生徒心得第十三條ヨリ第二十條マテノ數條ヲ犯シタルモノハ譴責ノ上品行點五點以上二十點以下ヲ減殺スルモノトス
- 第五條 生徒心得第二十一條ヨリ第二十五條マテノ數條ヲ犯シタルモノハ説諭ノ上品行點二十一點以上三十點以下ヲ減殺シ併セテ三日以内ノ貶席ニ處スルモノトス
- 第六條 生徒心得第二十六條ヨリ第三十條マテノ數條ヲ犯シタルモノハ説諭ノ上三十一點以上四十點以下ノ品行點ヲ減シ、併セテ七日以内ノ貶席ニ處スルモノトス

- 第七條 生徒心得第三十一條ヨリ第三十六條迄ノ數條ヲ犯シタルモノハ説諭ノ上四十一點以上ノ品行點ヲ減殺シ併セテ十日以内ノ貶席ニ處スルモノトス
- 第八條 品行簿ヲ紛失スルモノハ其ノ情實ヲ酌量シテ該月ノ品行點ヲ減殺スルモノトス
- 第九條 右ノ外品行ノ所爲アルモノハ所犯ノ輕重ニ應ジテ處置スルモノトス

一五、品行點減殺法心得附規則（明治十五年本縣）

品行點減殺法心得

- 第一條 校舎中ニ於テ高聲ヲ發シ或ハ疾走スル者
- 第二條 喫飯ノ節五ニ談話スル者
- 第三條 書籍機械及履歷書ヲ雜ニ取扱フ者
- 第四條 故ナク始業時刻ニ後ルル者
- 第五條 罪業必要ノ物品ヲ忘失スル者（以上ハ校則訓戒法第一條第一項戒諭ヲ施スモノトス）
- 第六條 金錢及ヒ玩弄物藥物等ヲ携帯シ上校スル者
- 第七條 私ニ書籍草紙等ノ貸借ヲナス者
- 第八條 相互ニ口論シ或ハ人ヲ誹謗シ又ハ虛言ヲ吐ク者（右ハ校則訓戒法第一條第二項貶席ニ處スルモノトス）
- 第九條 戸、障子ヲ亂打スル者
- 第十條 故ナク缺席スル者
- 第十一條 書籍機械並ニ品行簿等ヲ汚穢、毀損スル者

第十二條 校内ニ於イテ瓦石類ヲ擲ツ者

右ハ校則訓戒法第一條第三項別ニ處スル者トス

第十三條 戲ニ他人ノ物品ヲ藏匿スル者

第十四條 他人ノ衣類或ハ物品ヲ汚穢毀損スル者

第十五條 牆壁屋上樹木ニ上リ又ハ花實等ヲ折り取ル者

第十六條 途上ニテ食物ヲ食スル者

右ハ校則訓戒法第一條第四項ニ處スルモノトス

第十七條 校内及途上ニテ朋友ハ勿論犬猫ヲ毆打スル者

第十八條 諸揭示ヲ破ル者

第十九條 危險ノ遊戲ヲナス者

第二十條 校内ノ諸器械ヲ毀損シ及牆壁ニ戲書スル者

第二十一條 總テ人々ニ傷害ヲ加フル等ノ所爲アル者

右ハ校則訓戒法第一條第五項ニ處スル者トス

此條目ハ訓戒ヲ施スニ當テ甲乙大差ナカラシメン爲ニ設クル略ナレハ此ノ他訓戒ヲ施スヘキ事極メテ多カラシ、宜ク此條目ヲ根據トシ訓戒ヲ施スヘシ

品行採點規則

第一條 品行點ハ一日ノ全點ヲ五十點トシ失行アル毎ニ下條ニ依リテ全點ノ内ヲ減スル者トシ零點ニ至リテ止ム

第二條 左ノ失行ハ其ノ情狀ニ依リ一點乃至十點ヲ減ス

一、理由ナクシテ始業時間ニ後ルル者

一、許可ナクシテ玩弄物ヲ携帯スル者

一、猥ニ校中ヲ奔走スル者

一、猥ニ高聲ヲ發シ及喧嘩スル者

一、辨當外ノ食物ヲ携帯スル者

一、放課時間後許可ナクシテ教場ニ出入スル者

一、教場出入中ニテ私語若クハ體勢ヲ亂ス者

一、故意ニ白墨及墨等ヲ以テ身體ヲ汚ス者

一、就業中猥ニ席ヲ離レ或ハ惰容私語雜談スル者

一、許可ヲ受ケスシテ終業時間後校内ニ留ル者

一、戸障子閉閉ヲ粗暴ニシ或ハ建物腰掛机等ヲ亂打スル者

第三條 左ノ失行アル者ハ其ノ情狀ニヨリ五點乃至二十點ヲ減ス

一、稗史小説ヲ携帯スル者

一、私ニ物品ヲ貸借スル者

一、他人遊戲ヲ妨ケル者

一、必要ノ書籍器具及品行簿等ヲ遺失スルモノ

一、許可ナクシテ校門外ニ出ツル者

一、書籍器具及品行簿若クハ日課表類ヲ汚シ或ハ毀損スル者

- 一、猥褻ノ言語ヲ吐露スル者
- 一、禮讓ノ場合ニ敬容ヲ失スル者

第四條 左ノ失行アル者ハ其ノ情狀ニ依リ十點乃至三十點ヲ減ス

- 一、私ニ物品ヲ交易スル者

- 一、危險ノ遊ヲ爲シ或ハ斷リナク刃物ヲ使用スル者

- 一、瓦石、木片等ヲ抛擲スル者

- 一、墻壁屋上又ハ樹木等ヘ登ル者

- 一、樂書ヲナス者

- 一、猥リニ草木花實ヲ採折損スル者

- 一、喧嘩口論ヲ爲ス者

第五條 左ノ失行アル者ハ其情狀ニ依リ二十點乃至五十點ヲ減ス

- 一、私ニ物品ヲ賣買スル者

- 一、事故アリト雖モ教員ノ許可ヲ待タズ時間中恣ニ歸宅スル者

- 一、諸揭示ヲ破リ、校物及給貨品ヲ毀損スル者

- 一、虚言ヲ吐キ又ハ人ヲ讒謗スル者

- 一、無斷ニテ他人ノ物品ヲ用ヒ若クハ他人ノ物品ヲ藏匿スル者

- 一、往來人ニ對シ妨害ノ舉動アル者

- 一、不敬ノ言ヲナシ又ハ粗暴ノ行爲アル者

第六條 失行同時ニ兩項以上ニ亘ル時ハ重キ一方ニ就テ減點スヘシ、且明分ナシト雖モ其失行減點スヘキ者ト認ム

ル時ハ前數條ノ中類例ノ近キ條項ニ準據探點スヘシ

第七條 前數條ノ行爲アルトキハ減點ノ上後來ノ注意ヲ諱シ其ノ過失ニ出テス慎戒ヲ要スル者ハ總テ調誠ノ方法ニ

從フヘシ

第八條 調誠ハ現在ヲ戒メ後來ヲ諱シ惡習ヲ善化セシムルノ目的ニ外ナラス故ニ深慎鄭重ニ取扱ヒ其ノ事ノ疑ハシ

キカ如キハ妄リニ施行スヘカラス且之ヲ調誠スルノ屢々ナル時ハ隨テ抑強ノ心增長シ却テ善化ノ途ヲ難カ

ラシムル者ナレハ勉メテ寬恕ヲ旨トシ過嚴ノ弊ナキヤウ心懸クヘシ

第九條 不善ノ心ヨリ規則ヲ犯スモノハ必戒諭ノ上其ノ重キモノハ貶席若クハ別座セシメ其ノ他ノ罰ヲ科スルヲ得

ス

第十條 所犯ノ情狀不良ニ出テサル者ハ戒諭ニ止ムヘシト雖モ其屢々ナル者ハ尙前條ニ據ルヘシ

第十一條 戒諭ハ生徒ヲ別室ニ伴ヒ溫言和容懇篤ニ其不良ノ理由ヲ詳解シ後來ヲ戒慎セシムルモノトス

第十二條 貶席ハ授業中生徒ノ座席ヲ貶シ反省悔悟セシムルモノトス

第十三條 別座ハ授業中教員ノ傍ニ別ニ一席ヲ設ケ特ニ該生徒ノ品行ヲ監督シ謹慎自責ノ念ヲ生セシム、但シ教場ノ

都合ニ依リ末席生徒ノ次ニ空位ヲ設ケ其次ニ就カシムルモ苦シカラス

第十四條 戒諭ハ受持教員之ヲ執行シ、直チニ其頭末ヲ校長(校長ナキ校ハ首坐教員以下同シ)ヘ報告スヘシ

第十五條 貶席別座ハ之ヲ要スル事由ヲ校長ヘ申出テ其指揮ヲ受クヘシ校長ハ受持教員ト協議シ同人ノ參坐ノ上之ヲ

生徒ニ申渡スヘシ

第十六條 貶席別座ハ初ヨリ日限ヲ知ラシメス悔悟ノ情況ヲ見計ヒ受持教員ヨリ校長ニ申出テ其ノ許可ヲ經テ復席セ

シムヘシ
第十七條 貶席別座ハ勿論戒諭ト雖モ其ノ重キモノハ學務委員ヲ經テ父兄若クハ後見人等へ通知シ家庭ノ注意ヲ促ス
ヘシ

一六、教 員

明治五年の學制には「小學校教員ハ男女ヲ論セス年齢二十歳以上ニシテ師範學校卒業免狀ヲ得シモノニ非レハ其任ニ當ルコトヲ許サス」と規定されたが、其の當時に於てはまだ師範學校もなかつたのであるから、多くは寺子屋の教師又は僧侶などを以て小學校教員に充てたのであつた。當時教師の名稱は大助教（待遇十二圓）中助教（同十圓）小助教（同八圓）（一、二、三等助手（同四圓内外）と稱した。そして學科擔任制であつて一人一科を限りて教授してゐた即ち句讀科、洋算科、珠算科、習字科の教師に分れてゐたのであつた。

明治七年より教員の名稱は一、二、三等訓導、上等、中等、準訓導と稱せられるやうになつた。

明治十二年の教育令では公立小學校教員の資格を年齢十八以上で師範學校卒業としたけれ共實際に於て有資格者は容易に得られないので「教員に相應せる學力を有する者は教員たるも妨なし」と許容した。

明治十三年の改正教育令では、師範學校を卒業しないものには府縣知事より教員免許狀を受けることを必要とすと限定した。

小學校教員に對する當局の指導監督も創生の時代であつたから、懇切なものであつた。即ち明治六年十二月本縣は小學教師心得、明治十四年六月文部省諭達の小學校教員心得について十五年六月本縣また小學校教員心得を布達し、小學校教師の職責の重大なる事を諭し、また一方教授法に關しても教員傳習規則を定めて講習を行つて全校教員に傳授せしめた。左に其の規定を掲げる。

イ、教員傳習規則（明治十六年一月）

第一條 本則ハ明治十六年乙第可三十七號達小學校教員講習規則第二條ノ趣旨ニ基キ講習未済ノ教員及ヒ補助員以下ヲ左ノ各條ニ依リテ傳習セシムルモノトス

第二條 傳習所ハ各小學校ヲ以テ之ニ充テ、講習濟筆頭教員ヲシテ擔當セシメ、外講習濟教員ト共ニ傳習セシムルモノトス

第三條 前條傳習ハ曩ニ師範學校ニ於テ講習シ得タル者及ヒ他ノ書類ヲ併セ研究セシム、其ノ順序日割時間等左ノ如シ

每 火 曜 日	自午後三時	至同 五時	弘道館記述義、教員心得
	自同 五時	至同 五時三十分	體 操
每 木 曜 日	自午後三時	至同 五時	教育學、小學管理法
	自同 五時	至同 五時三十分	體 操
第一第三土曜日	自午後一時三十分至同 四時三十分		教授法、教科書
	自同 四時三十分至同 五時		體 操

右ハ各校ニ於テ施行ス

第二土曜日 自午後一時三十分至同 四時三十分

教育學、小學管理法、教員心得、神代正語、日本政記、古事記、皇朝史略、日本書記、國史纂論

右ハ畫一ヲ要スル爲メ、五等訓導以上集會、他ノ書籍ト共ニ各校選次ニ開キ講習

第四條 右日割當日ハ學務擔任書記臨席共勤惰等ヲ監査スルモノトス

第五條 傳習中缺席スルヲ得ズ、若シ止ムヲ得ザル事故アリ出席スル能ハザルトキハ書面ヲ以テ擔任教員へ其ノ旨
臨席區書記へ通報スルモノトス

第六條 傳習ハ凡ソ一順通スルヲ期シテ了ルモノトス

第七條 向後講習未済ノ教員並補助員授業生アルトキハ第二條ニ依リ傳習セシムルモノトス

ロ、本校創立當時の教員

當時に於ては師範學校卒業の有資格者は容易に得られないので、當地に於ける漢學に素養あるものが其の任に當つてゐた。即ち習部屋（當地では寺子屋の事を斯く稱へてゐた）の教師又は僧侶などを以て小學校教員に充てゝゐたのである。

本校に於ける當時の教員は大江（武井）太吉郎氏、武貞久吉氏其他一、二名であつた。

ハ、本校創立當時の兒童

當時池田、西代、板宿、大手、東須磨、妙法寺、車、の七ヶ村を通學區域としたもので兒童數は約三、四十名あつた。其の就學狀態は充分とはいへなかつた。

第二十一章 私立東須磨校教育會

一、教育會設立以前の狀況

本校教育の充實發展のために、敵くことの出来ぬ援助機關として、最も重要な地位を占めて居るものは、實に我が教育會である。今首を廻らして遠く其の濫觴を回顧すれば、明治三十七年の昔に溯ることが出来る。本校教育が軌道に乗つて着々と、其の堅實な歩を進めるやうになつたのは、風光明媚の現在の地に校地をトシ、新校舎を起した明治三十七年のことである。其の當時から教育會設立の機運は已に胎動を感じられてゐたのである。後二年の星霜を経て明治三十九年六月校舎の増築成り機は促進された。時は恰も日露の戦雲も晴れて世は平和の春に蘇へり、國威洋々として進展の一路を辿らんとし、神戸港の國際的地位にも拍車を加へんとする時に當つてゐた。當時の保護者會の案内状を見るに

拜啓 此度増築校舎落成致候間此際を期し保護者會相聞き種々御懇談申上度次第も御座候間萬障御繰合せの上來る七日午前九時までに是非共御出席相成度御案内申上候也

明治三十九年七月五日

東須磨尋常高等小學校

殿

保護者會の内容は今知る由もないが、教育會設立の機運はかゝる所にもその一端を窺ひ知ることが出来る。

二、教育會の創立

歴代會長



初代 故 島田政市氏



二代 松田三郎氏



三代 故 島田太一郎氏



現會長 堀 菅 吉氏



四代 兼 吉兵衛氏



五代 兼 吉藤兵衛氏



六代 故 武貞増太郎氏

機運の動きは、遂に實現にまで發展した。校内有志の會合、學校側との折衝は數次に亘つて行はれたのであるが、其の間主として設立の衝に當つたのは當時の村長兼吉寛兵衛氏及校長朝倉景信氏であつた。明治四十年十一月一日校長は村役場に出頭して最後の熱議を凝らし準備全く成つたのである。時はよし、十一月三日、明治大帝御降誕の菊薫る佳節に我が教育會も亦男々しく誕生したのである。來會するもの約百名。會の名稱を私立東須磨校區教育會と定め、初代會長として嶋田政市氏が推薦された。

三、教育會の發展經過

(1) 會 則

創立當時の會則並その後改正されたる明細なる記録なきため、變更の過程を明にすることができないのは遺憾であるが、種々な記録によつて大體の動きについて概略の見通しは出来る。創立當時の會則は目的、會員、事務所、事業、組織、入會、退會、除名、會費、役員、役員の仕事、會計、會合、會則變更の十四條より成立つてゐた。それが昭和十一年の改正によつて、現在の十條となつた。この間會則の内容上にも幾多の改正がなされてゐるのであるが、その點については不完全ながら後掲の會則變更一覽によつて推移の一般を察知することが出来る。會則變更中最も時勢の影響を受けたものは、會員と會費に關するものである。随つて一覽表も主としてこれに關する記録が大部分を占めてゐる。

會則變更一覽

條項	創立當時	經過	現在(昭和十一年改正)
----	------	----	-------------

稱名	員會	費
私立東須磨校區教育會	正會員 (年額三十錢) 特別會員 (年額五十錢) 名譽會員 (金品五圓以上ノ寄附者)	大正九年私立東須磨校區教育會ト變更 大正十五年一般社會的教育會ト混同セラレヌ様私立 東須磨校區教育會ト校ノ一字ヲ加フ
私立東須磨校教育會	正會員 (年額四十錢) 特別會員 (年額六十錢) 名譽會員 (イ) 本會ニ對シテ特別功勞アルモノニシテ本會ノ推薦セシモノ (ロ) 會員ニシテ金五圓以上ノ金品ヲ寄附セル者 (但會費ハ別ニ納ム) 大正二年改正 會費ハ四十錢均一トス 大正十年改正 正會員 (イ) 現在東須磨校奉職教員 (ロ) 會費月額一口五錢ヲ納ムルモノ 但幾口ニテモ申込ムコトヲ得 (四口マデ) 特別會員 (イ) 本會又ハ學校ヘ金十圓以上ノ金品ヲ寄附セルモノ (ロ) 會費五口以上負擔セルモノ (ハ) 曾テ在職セル職員ニシテ本會ノ推薦セルモノ	大正九年度ノ會員數ハ二八 六人デアアルガ、昭和十五年 度初ニ於ケル會員數ハ二〇 二四人ト増加シテキル

員	役	費	會
評任期二年 十六名	副會長 幹事 會長 評議員	大正十五年改正 會費一口ヲ月額十錢トス 特別會員ノ資格中、金十圓以上ノ寄附者ノ條項ハ 金品三十圓以上ト改正 其他ハ變更ナク十年改正當時ノ如シ	名譽會員 モノ (イ) 本會ニ對シ特別功勞アルモノニシテ本會ノ推薦セルモノ (ロ) 金品百圓以上ノ寄附者 (ハ) 職員トシテ十年以上勤続シタルモノ 大正十五年改正 會費一口ヲ月額十錢トス 特別會員ノ資格中、金十圓以上ノ寄附者ノ條項ハ 金品三十圓以上ト改正 其他ハ變更ナク十年改正當時ノ如シ
大正五年改正	大正三年改正 大正二年改正 大正五年改正	明治四十三年改正 會長ハ選舉ス、副會長ハ學校長就任、幹事以下役 員ハ會長任命ス、評議員ヲ二十五名トス 明治四十五年改正 評議員定員ヲ十七名トス、東須磨村ハ各區二名、 他ノ大字ハ二名 大正二年改正 大字組長ハ必ズ評議員ニ推薦ス 大正三年改正 評議員ハ十八名、幹事四名トス 大正五年改正	會長一名 (推薦) 副會長一名 () 幹事四名 (會長指名) 評議員若干名 () 總テ任期ハ二年再選可能 備考 役員ノ氏名ハ別項ニ掲ゲル

評議員十六名トス 大正八年改正 評議員十名トス（東須磨、大手、中須磨、西代、各二名）
--

現在の會則

私立東須磨校教育會々則（昭和十一年五月改正）

- 第一條 本會ハ私立東須磨校教育會ト稱シ事務所ヲ東須磨尋常小學校内ニ置ケ
- 第二條 本會ハ東須磨尋常小學校ノ教育事業ヲ後援シ學校ト家庭トノ連絡ヲ圖ルヲ以テ目的トス
- 第三條 本會ハ東須磨尋常小學校兒童ノ保護者ヲ以テ組織ス 但保護者ニアラズト雖モ本會ノ趣旨ニ賛成スルモノハ加入スルコトヲ得
- 第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置キ總テ名譽職トス
 - 會長 一名 本會ノ推薦ニヨリテ定メ其ノ任期ヲ二ケ年トス 但シ滿期後再選スルコトヲ得
 - 副會長 一名 同上
 - 幹事 四名 會長ノ指名ニヨリテ定メ其ノ任期ヲ二ケ年トス
 - 評議員 若干名 同上
- 第五條 本會役員ノ任務左ノ如シ
 - 1 會長ハ本會ヲ總理ス
 - 2 副會長ハ常務ヲ執行シ併セテ會長ヲ補佐シ會長事故アル時ハ之ニ代ルモノトス

- 3 幹事ハ會長ノ指揮ヲ受ケ會務ヲ分擔處理ス
- 4 評議員ハ本會重要ノ事項ニツキ協議シ又ハ諮問ニ應ズルモノトス
- 第六條 本會ハ第二條ノ目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ行フ
 - 1 學校家庭相互ノ關係ヲ密接ナラシムル事項
 - 2 東須磨校教育ノ向上發達ニ資スベキ事項
 - 3 善行又ハ功勞アリタル者ノ表彰及慰勞
 - 4 東須磨校同窓會ノ健全ナル發達ニ資スベキ事項
- 第七條 本會ノ經費ハ會員離出ノ會費及寄附金ヲ以テ支辨ス
會費ハ會員一人ニ付年額金一回十錢トシ四月、九月、一月ノ三回ニ分納スルヲ本體トス 但會員ノ子弟ニシテ在學スルモノ數名ニ及ブトキハ其ノ數ニ應ジ増額離出スルコトヲ得
- 第八條 本會ノ會計年度ハ四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル
- 第九條 本會ハ毎年一回四月總會ヲ開キ歳入出ノ豫算ヲ諮リ事業並ニ會計決算ノ報告ヲナスモノトス
- 第十條 本會則ヲ變更セントスルトキハ總會ノ決議ヲ要スルモノトス

(2) 會員と役員

昭和十一年の改正に至るまでは、會員には正會員、特別會員、名譽會員の三種類があり、其々の資格には一定の標準があつた。無論その標準も時代の進運に隨つて變動のあつたことは當然である。この三種の別は、昭和十一年の改正によつて廢せられ、現在に至つてゐる。
經費は會員より徴收する會費によつて支辨するのは勿論のことであるが、會員の寄附にまつことも忘れることはで

きない。松井佐助、武井尹人、鈴木よね子、岡崎藤吉諸氏の各千圓、有馬市太郎、井上寅次郎氏等の五百圓を筆頭として一圓未満に至るまで枚舉に暇なき程である。又同一人にして數回に亘りて寄附されし如き熱心なる聲援者も、多數に上つてゐる。今その全部の芳名を列舉し得ないことは遺憾である。

役員資格、定員、任務等につきては、會則の示す通りである、東須磨校教育の圓滿なる發展が役員諸氏の献身的努力にまつこと大なるは今更に説するを要しない。此處に芳名を列記して、感謝の意を表したい。

明治四十年

會長 島田政市 副會長 朝倉景信

評議員 西光雄右衛門、西光新左衛門、森本卯之吉、島田鶴松、松田和三郎、

錦谷文三郎、名倉仁左衛門、上野茂兵衛、淺井常松、兼吉藤兵衛、

松田半左衛門、足立貞太郎、芝田種一郎、小高左近衛門、武井楚太郎、

友弘莊次郎、足立秀純(追薦)

幹事 島田友右衛門、森本市松、窪井安次郎、廣瀬一夫、久保諒太郎、

明治四十三年改選

會長 松田和三郎 副會長 朝倉景信

評議員 長谷川常雄、長谷川宗吉、藏前熊次郎、松田庄吉、錦谷文三郎、

西光新左衛門、名倉周藏、小泉槌藏、佐野榮太郎、野澤磯吉、

上野秀次郎、澤田爲次、友弘莊次郎、松田本太郎、兼吉友吉、

安井請宣、堀内榮吉、西光雄右衛門、隅野市太郎、萩野清一郎、

濱田長吉、芝田伊太郎、山本新太郎、秋宗常太郎、兼吉卯之松、

兼吉寛兵衛(追薦)

幹事 島田友右衛門、廣瀬一夫、村上岩吉、大森茂右衛門、高見信太郎、

葛原健三郎(追薦)

明治四十五年改選

會長 島田龜太郎 副會長 朝倉景信

評議員 名倉周三、上野秀次郎、島田鶴松、萩野清一郎、小泉槌藏、

淺井常松、西光雄右衛門、田中竹三郎、隅野市太郎、長谷川常雄、

兼吉寛兵衛、松田本太郎、友廣莊次郎、武貞増太郎、土井徹之助、

山本新太郎、安井請宣

幹事 松田和三郎、島田友右衛門、廣瀬一夫、高見信太郎、村上岩吉

大正三年改選

會長 島田龜太郎 副會長 朝倉景信

評議員 田中竹三郎、佐野榮太郎、住野市太郎、長谷川常雄、枝光寅太郎、

上野秀次郎、松田元吉、島田鶴松、長谷川順一郎、小泉槌藏、

淺井常松、兼吉寛兵衛、松田本太郎、友廣莊次郎、武貞増太郎、

澤田爲次、柴田種一郎、福田伊之助

幹事 廣瀬一夫、松田和三郎、村上岩合、森中美郎

大正五年改選

會長 島田龜太郎 副會長 吉田六太郎
 評議員 枝光寅太郎、上野秀次郎、松田元吉、田中竹三郎、佐野榮太郎、
 島田鶴松、長谷川順一郎、隅野市太郎、長谷川常雄、福田伊之助、
 兼吉寛兵衛、松田本次郎、友廣莊次郎、武貞増太郎、澤田爲次、
 芝田種一郎
 幹事 廣瀬一夫、村上岩吉、玉木政藏、近藤政好

大正七年改選

會長 兼吉寛兵衛 副會長 森本俊治
 評議員 全部留任、後に兼吉寛兵衛、松田本次郎の兩氏辭任し兼吉藤兵衛、河井榮太郎兩氏推薦さる。
 幹事 全部留任

大正八年改選(臨時)

此の年校區變更のため天井川以西は須磨校に轉籍、從つて天井川以西の役員全部退會辭任せらる。

會長 兼吉寛兵衛 副會長 古島清太郎
 評議員 香山熊吉、宮本巳之助、福田伊之助、西本長太郎、兼吉藤兵衛、
 松田本次郎、友廣莊次郎、武貞増太郎、澤田爲次、芝田種一郎
 幹事 頼廣善三郎、小高實藏、玉木政藏、近藤政好
 大正九年改選

會長 兼吉藤兵衛 副會長 並河忠藏

評議員及幹事に異動なし。

大正十一年改選

會長 武貞増太郎 副會長 並河忠藏
 評議員 堀内四郎、福田忠次郎、久村住雄、香山熊吉、瓜谷良藏、
 山田徳三郎、岡庄吉、岡本善之助、河井榮太郎、武井幾太郎、
 秋宗久永、菅原徳次郎、土居賢之助、大崎利一郎、澤田甚兵衛、
 芝田嘉右衛門
 幹事 鷺尾知治、布施協、近藤政好、小高實藏

大正十三年改選

會長 武貞増太郎 副會長 並河忠藏
 評議員 香山熊吉、岸田福太郎、瓜谷良藏、秋本城之助、堀省三、
 河井榮太郎、兼吉寛兵衛、岡本善之助、大村敬吉、武井幾太郎、
 秋宗久永、進藤信義、菅原徳太郎、小高左近右衛門、土居賢之助、
 柴田嘉右衛門、大崎利一郎、高橋京吉、北井寅太郎、福田忠次郎、
 富田秀三郎、久村住雄
 幹事 布施協、近藤政好、小高實藏、柳井覺二

大正十五年改選

會長 武貞増太郎 副會長 菅原貫治
 評議員 友廣彌一郎、岡 庄吉、岡本善之助、香山熊吉、河井榮太郎、
 武井幾太郎、瓜谷良藏、山田徳三郎、松田卯三郎、正 田 茂、
 福田忠次郎、藤井精一、小高左近右衛門、秋宗久永、安東元治郎、
 佐藤正作、澤田甚兵衛、島 田 滾、久村住雄
 幹事 長島淳一、長谷川章三、平松悦治、山下元治、小高實藏、
 柳井覺二

昭和三年改選

會長 武貞増太郎 副會長 植芝康起
 評議員 武井幾太郎、秋宗久永、藤井精一、河井榮太郎、佐藤正作、
 岡 庄吉、岡本善之助、有本末吉、渡邊松五郎、香山熊吉、
 山田徳三郎、松田卯三郎、瓜谷良藏、福田忠次郎、井口哲宗、
 糸井榮次、榎本初五郎、有坂亮平、佐藤嘉明
 幹事は全部留任

昭和五年改選

この年九月一日板宿校分離獨立につき役員にも相當の變動あり。十一月十五日をもつて會長の事務引繼をなし役員の推薦決定をなす。

會長 堀 音吉 副會長 植芝康起

評議員 松田卯三郎、瓜谷良藏、有坂亮平、福田忠次郎、山田徳三郎、
 香山熊吉、加藤清太郎、榎本初五郎、河井榮太郎、佐藤正作、
 岡本善之助、堀本八十二、大前千松、有本末吉、糸井榮次、
 井口哲宗、坂口健吉
 幹事 江本益三、長谷川章三、山下元治、柳井覺二、富井英亮

昭和八年改選

前回の改選が昭和五年十一月十五日であつて普通に改選の行はれる時期でなかつたためか、昭和六年、同七年には改選を行はず。

會長 堀 音吉 副會長 近藤政好
 評議員 榎本初五郎、佐藤正作、加藤清太郎、河井榮太郎、岡本善之助、
 山田徳三郎、香山熊吉、福田忠次郎、瓜谷篤治、井口哲宗、
 糸井榮次、坂口健吉、有本末吉、大前千松、堀本八十二、
 山口敬一、山本定吉、今村正太郎
 幹事 江本益三、長谷川章三、國友光三、島津新治

昭和十年改選

正確なる記録なけれ共大體留任の如し。

昭和十一年改選

社會の情勢は從來の組織を許さざるに至り、自然、會則の變更も急を要するに至りし爲、清新の氣を注入し會の躍

進を期せんために改選をなす。

會長 堀 晋吉 副會長 近藤政好

評議員

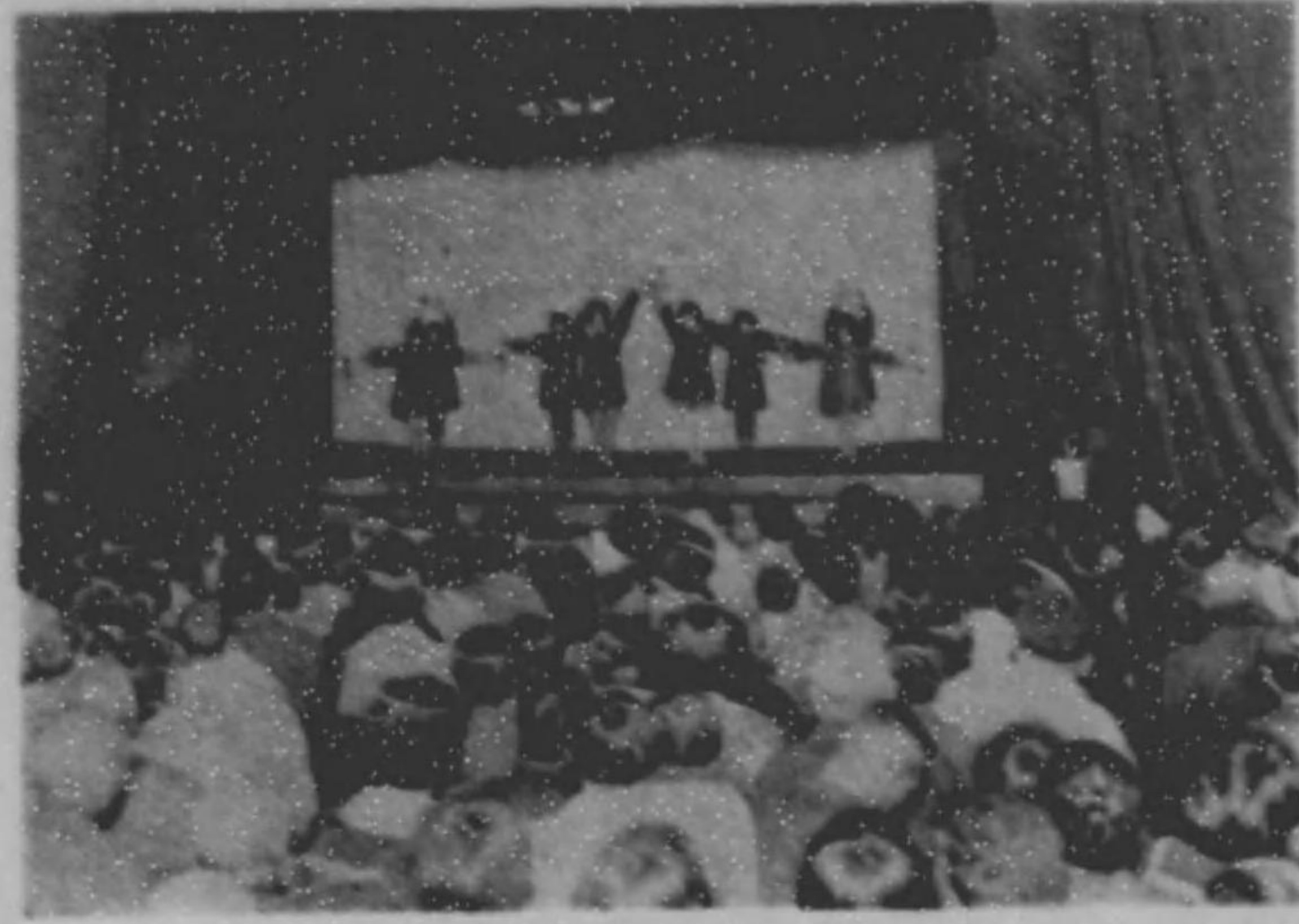
岡 喜一郎、西光梅太郎、淺田石松、麻生政一郎、生島正良、
 瓜谷篤治、岡本眞一、角田參次、香山熊吉、川村隆士、
 岸田福太郎、木村兼助、桑山松藏、末正榮藏、高井幸次郎、
 瀧川 勇、直木由之助、原田四五六、山口敬一、山田徳三郎、
 山本定吉、和田健二、赤松徳亮、有川愛治、今井三五郎、
 榎本隆造、岡田正方、岡本善之助、加藤清太郎、兼吉寛兵衛、
 河井榮太郎、崎山好春、佐藤正作、高橋清兵衛、廣瀬秀吉、
 山下政吉、有本末吉、大前千松、笹 才助、森 俊造、
 井口哲宗、坂口健吉、吉村太一、福田岩太郎、西田壽吉、
 安平吉太郎、長谷川章三、小林俵次、佐藤熊太郎

昭和十三年改選

會長 堀 晋吉 副會長 山下元治

評議員

瓜谷篤治、岡本眞一、角田參治、香山熊吉、桑山松藏、
 川村隆士、岸田福太郎、末正榮藏、高井幸次郎、瀧川 勇、
 直木由之助、原田四五六、山田徳三郎、山本定吉、和田健二、
 山崎良貞、有川愛治、今井三五郎、榎本隆造、植田寅太郎、



(部一の會藝學)

幹事 長谷川章三、

小林俵次、
 佐藤熊太郎、
 田村茂一

昭和十五年改選

會長、副會長 留任

評議員 留任 但し前回改選後死去せられし赤松徳亮氏及轉勤せ

られし桑山松藏、井口哲宗、木下直春の三氏を除く。

幹事 長谷川章三、田村茂一、綱 周一

(3) 事業



(部一の會動運)

イ、經常費による事業

會員より徴収する會費は唯一の財源である。昭和十年に至るまでは、特別會員、名譽會員、並に口數制度があつたので、寄附による金額も相當あつたが、右の制度が廢せられた今日は、會員は一律に兒童一人について、年額一圓十錢を納める様になつた。只寄附行爲は認めてあるが、従前の如き特別の資格はない。自然會費の總額は主として會員數の多少に懸つてゐるのである。現在の會員數は二千人を超えてゐる。



(部一の設施護養)

一度計畫された事業が長く續續されてゐるものもあるが、時代の影響を受けて廢せられたものもある。その全部を載せることは困難であるが、大別すれば次の四種類に關するものとなる。即ち總會、職員、兒童、雜件等である。その中兒童に關するものが中心をなすのは會の目的上當然のことである。

事業の種類を一瞥するに、昭和三年に於て殆んど出揃つてゐるやうである。その後は經費に變遷はあつても、内容上特に新しいものはない。無論



(會話おいしのだ 部一の設施期夏)

逐年その内容は充實し整備されて今日に及んでゐる。次に掲げる表は、新しく計畫された事業を年度順に示したものである。總會に關するものは省略した。後掲の支出總額一覽表と對照して見れば、本校教育上に於ける教育會の事業が如何な動きをもつて経過し來つたかを大觀することが出來よう。

新計畫事業一覽 (括弧内の數字は金額を表す)

年次	明四年 治一年	三四年	四四年	五四年	大二年 正三年	三四年	四四年	五四年
教師に關するもの	一、教員優待のため卒業兒童保護者より寄附金を募集す 二、準備教員を報賞す(一五) 三、教員獎勵金(五) 四、在勤教員を表彰して感謝狀と浴地衣を送る	一、校長優待記念品を送る 二、教員六名賞賜(一五) 三、酒肴料一〇圓を送つて教員優待	一、校長優待記念品を送る 二、教員六名賞賜(一五) 三、酒肴料一〇圓を送つて教員優待	一、校長優待記念品を送る 二、教員六名賞賜(一五) 三、酒肴料一〇圓を送つて教員優待	一、職員退轉勤者を慰勞す(一五) 二、高見信太郎へ記念品 三、十年勤続者表賞 四、小高實藏へ記念品(五) 五、朝倉氏に記念品(一〇) 六、教員全部慰勞	一、校長優待記念品を送る 二、教員六名賞賜(一五) 三、酒肴料一〇圓を送つて教員優待	一、校長優待記念品を送る 二、教員六名賞賜(一五) 三、酒肴料一〇圓を送つて教員優待	一、校長優待記念品を送る 二、教員六名賞賜(一五) 三、酒肴料一〇圓を送つて教員優待
直接兒童に關するもの	一、兒童獎勵金(八) 二、運動會賞與(二〇)	一、賞狀、賞牌を授與して學力操行優等兒童選賞(一學級二名以下) 二、生徒獎勵金(一二)	一、賞狀、賞牌を授與して學力操行優等兒童選賞(一學級二名以下) 二、生徒獎勵金(一二)	一、賞狀、賞牌を授與して學力操行優等兒童選賞(一學級二名以下) 二、生徒獎勵金(一二)	一、賞狀、賞牌を授與して學力操行優等兒童選賞(一學級二名以下) 二、生徒獎勵金(一二)	一、賞狀、賞牌を授與して學力操行優等兒童選賞(一學級二名以下) 二、生徒獎勵金(一二)	一、賞狀、賞牌を授與して學力操行優等兒童選賞(一學級二名以下) 二、生徒獎勵金(一二)	一、賞狀、賞牌を授與して學力操行優等兒童選賞(一學級二名以下) 二、生徒獎勵金(一二)
その他	一、運動會に幕二枚寄附 二、會旗新調	一、二年一回役員教育觀察をなす	一、二年一回役員教育觀察をなす	一、二年一回役員教育觀察をなす	一、二年一回役員教育觀察をなす	一、二年一回役員教育觀察をなす	一、二年一回役員教育觀察をなす	一、二年一回役員教育觀察をなす

款	項	前年度	本年度	增減	備考
7	學園補助費	100.00	100.00	○	苗木、種子、肥料、用具等購入其ノ他ノ補助
8	夏季施設補助費	100.00	100.00	○	海水浴、夏季心身訓練、林間學舍等ノ補助
3	研究費	200.00	200.00	○	講習會出席、觀察旅行等ノ補助
1	講習費	100.00	100.00	○	講習會、調查會、書籍購入等ノ補助
2	研究調查費	100.00	100.00	○	死亡弔慰四件
3	職員使了弔慰費	100.00	100.00	○	
4	雜費	100.00	100.00	○	
5	預備費	100.00	100.00	○	
合計		1,000.00	1,000.00	○	

收支比較之部

收入總額	2,120.10	2,090.12	30.98	次年度へ繰越
支出總額	2,120.10	2,090.12	30.98	
餘額	0.00	0.00	0.00	

本會基金現在高 金八百七拾八圓拾貳錢也

私立東須磨校教育會昭和十五年度豫算書 (△減○增)

款	項	前年度	本年度	增減	備考
1	總會費	1,000.00	1,000.00	○	
2	役員會費	100.00	100.00	○	
3	父兄會補助費	100.00	100.00	○	
4	會報發行費	100.00	100.00	○	
5	印刷費	100.00	100.00	○	
6	事務手當	200.00	200.00	○	
7	表彰費	100.00	100.00	○	
8	本會備員費	100.00	100.00	○	
9	處女會補助費	100.00	100.00	○	
10	消耗品費	100.00	100.00	○	
1	兒童費	1,100.00	1,100.00	○	
2	學習補助費	100.00	100.00	○	
3	體育補助費	100.00	100.00	○	
4	調育補助費	100.00	100.00	○	
5	文庫補助費	100.00	100.00	○	
6	獎勵補助費	100.00	100.00	○	
7	衛生補助費	100.00	100.00	○	
8	學園補助費	100.00	100.00	○	
合計		2,120.10	2,120.10	○	

收入之部

款	項	前年度	本年度	增減	備考
1	總會費	1,000.00	1,000.00	○	
2	役員會費	100.00	100.00	○	
3	父兄會補助費	100.00	100.00	○	
4	會報發行費	100.00	100.00	○	
5	印刷費	100.00	100.00	○	
6	事務手當	200.00	200.00	○	
7	表彰費	100.00	100.00	○	
8	本會備員費	100.00	100.00	○	
9	處女會補助費	100.00	100.00	○	
10	消耗品費	100.00	100.00	○	
1	兒童費	1,100.00	1,100.00	○	
2	學習補助費	100.00	100.00	○	
3	體育補助費	100.00	100.00	○	
4	調育補助費	100.00	100.00	○	
5	文庫補助費	100.00	100.00	○	
6	獎勵補助費	100.00	100.00	○	
7	衛生補助費	100.00	100.00	○	
8	學園補助費	100.00	100.00	○	
合計		2,120.10	2,120.10	○	

支出之部

2、名譽會員 會員又ハ會員以外ニシテ金 圓以上ノ金品ヲ寄附シタルモノ及ビ本會ニ對シテ特ニ功勞アルモノニシテ本會ヨリ推薦シタルモノ並ニ母校職員タルモノ

第六條 正會員ハ年額六十錢ノ會費ヲ四月、八月、十二月ノ三期ニ二十錢ヅツ分納スルモノトス

第七條 本會員ニシテ本會ノ目的ニ反シ會員タル義務ヲ果サズ或ハ會員タルノ體面ヲ汚瀆スル行爲アリテ役員ノ忠告アルモ尙肯ゼザルモノアルトキハ役員會ノ協議ヲ經テ除名スルコトアルベシ

第八條 本會ニハ左ノ役員ヲ置キ何レモ名譽職トス

會長 一名 母校々長ヲ推薦ス

副會長 一名 母校首席訓導ヲ推薦ス

顧問 二名 母校職員中ヨリ推薦ス

幹事 八名 東須磨部 二名 新田部 一名 中須磨部 一名 大手部 一名

板宿部 一名 西代部 一名 奥部 一名

評議員 十五名 東須磨部 六名 新田部 一名 中須磨部 一名 大手部 一名

板宿部 二名 西代部 二名 奥部 二名

幹事ハ各部落會員ノ推薦ニヨリテ定ム、評議員ハ會長ノ指名ニヨル、幹事評議員ノ任期ハ一ケ年トシ滿期後再選スルコトヲ得

第九條 本會役員ノ職掌左ノ如シ

1、會長ハ本會ヲ總理ス

2、副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルキトハ之ニ代ルモノトス

3、顧問ハ會長ノ指揮ヲ受ケ會計及一般事務ヲ處理ス

4、幹事ハ會長ノ指揮ヲ受ケテ部落ニ於ケル會務ヲ掌ルモノトス

5、評議員ハ本會々則ノ事項ニ付キ協議シ又ハ諮問ニ應ジ同部落幹事ノ事務ヲ補助ス

第十條 本會ハ毎年夏冬二回ニ總會ヲ開ク期日ハ其都度會長ヨリ通告ス 但シ役員ノ決議ニヨリ臨時總會ヲ開クコトアルベシ

第十一條 會則ノ變更ハ總會ノ決議ヲ要ス

其の後大正十一年三月六日

同女子同窓會が設立せられました、當時の會則左の如し。

二、東須磨女子部同窓會々則

第一條 本會ハ卒業生相互ノ情誼ヲ温メ智徳ヲ啓發シ兼ネテ母校トノ連絡ヲ計ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ東須磨尋常小學校女子卒業生ヲ以テ組織ス

第三條 本會ハ東須磨尋常小學校女子同窓會ト稱シ事務所ヲ東須磨尋常小學校内ニ置ク

第四條 本會ノ事業ハ概ネ次ノ如シ

講演會開催 會員相互慰安 會誌發行 母校後援

第五條 本會ノ會員ヲ分チテ左ノ三種トス

正會員 本校女子卒業生トス

客會員 母校在職々員及舊職員トス

名譽會員 本會ニ特ニ功勞アリテ本會ノ推薦ヲウケタルモノトス

第六條 會費ハ一人金壹圓トス但總會ノ茶話會費ハ自辨トス

第七條 本會ノ役員ヲ次ノ如ク定ム

會長一名 母校々長ヲ推戴ス 校內幹事 三名 校外幹事 若干名 會長ノ指名ニヨリテコレヲ定メ其任期ヲ二ケ年トス

第八條 本會役員ノ任務左ノ如シ

會長ハ本會ヲ總理ス、校內幹事ハ會長ト共ニ會務ヲ處理ス、校外幹事ハ會長ト共ニ重要事項ヲ協議シ會務ヲ處理ス、校外幹事中幹事長ヲ互選ス、但任期ハ二ケ年トス

第九條 本會ハ毎年一回總會ヲ開ク

夏休第一日曜ニ開クヲ本體トス、但シ幹事協議ノ上臨時總會ヲ開クコトヲ得

是の如く男子女子部同志會が設立せられ、本校卒業生の發展は益々世に認められるに至つたが、世勢の狀態と同一母校卒業生なる理由の基に幹事會の協議により東須磨同志會と改稱し會則も改正せられ此處に態型を整へたのであります。

三、東須磨校同志會々則（現行）

第一條 本會ヲ東須磨同志會ト稱ス

第二條 本會ハ左ノ目的ヲ以テ東須磨尋常小學校卒業生ニヨリ組織ス

一、長ク同志ノ情義ヲ重ンジ會員相互ノ交際ヲ親密ニナス

二、正會員ノ教育ヲ繼續シ智徳體ノ向上ヲ計ル

三、後進ヲ誘掖指導シ母校ノ美風ヲ發揮ス

四、勤儉尙武ノ氣風ヲ養ヒ兵役ノ義務ヲ全ウスルコト

五、温良貞淑ノ氣風ヲ養ヒ婦徳ヲ全ウスルコト

第三條 本會々員ヲ左ノ二種トス

一、正會員 本校卒業生

二、特別會員 母校在職々員及ビ母校職員タリシ者

第四條 本會ハ第二條ノ目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲナス

一、毎年八月第一日曜日ニ總會ヲ開ク、但シ臨時之ヲ開ク事ヲ得

二、會員ノ凶事ニハ弔慰ヲ表ス

三、會員ノ入退營ヲ祝賀スルコト

四、其他役員會ニテ決議シタル事項

第五條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一、會長 一名 二、副會長 一名 三、幹事 若干名 四、校內幹事 若干名

第六條 會長ハ母校々長ヲ推戴ス

第七條 副會長ハ母校首席指導ヲ推戴ス

第八條 校內幹事ハ會長之ヲ依囑シ幹事ハ會員中ヨリ互選ス、但シ幹事ノ任期ハ一ケ年トス

第九條 臨時會合ニ於テ特殊ノ經費ヲ要スルモノハ出席會員ニ於テ實費ヲ負擔スルモノトス

第十條 基本金ハ卒業ト同時ニ金壹圓納付スルモノトス

第十一條 經費ノ豫算決算ハ校內幹事ニ於テ之ヲ決定シ其ノ收支ハ總會ニ於テ一般ニ報告ス

第十二條 本會則ノ修正又ハ變更ヲ要スルモノアルトキハ總會ニ於テ之ヲ議定ス但出席會員ノ三分ノ二以上ノ賛成ヲ要ス

第十三條 本會々員中不都合ノ行爲アリタルモノハ之ヲ除名ス

第十四條 會員中住所ヲ移轉シタルモノ若クハ身上ニ異動ヲ生ジタルモノハ必ず本會ニ届出ヅルコト

現 狀 の 摘 記

- 一、本會が設立してより二十有九年其の間年々多數の會員を加へ現在では約一萬の同窓會員を有してゐる。
- 二、會員はすべての方面に發展して國家的樞要な地位にゐる人が多數にある。
- 三、本會は總會、幹事會、入退營兵の歡送迎會、特別會員轉退職の場合の記念品贈呈、母校職員と同窓生間、同窓生同志の間の情義を一層深くしてゐる。
- 四、同窓生の母校を訪ふもの日一日と多きを加へ母校愛の情を湧出してゐる。
- 五、總會、幹事會には年々來會者を増しそれが何の遠慮もなく在學當時にかへつて歡談するのは實に愉快である。
- 六、入退營兵歡送迎會は當人の士氣を鼓舞して東須磨魂の發揮を誓はしめてゐる。
- 七、現在役員左の通り。

會 長 山下元治先生 副會長 長谷川章三先生
校內幹事 安田悦二先生 脇田秀人先生

第二十三章 東須磨母の會

一、創 立 昭和十二年三月六日

子供は家の寶であり、社會の寶であり、國家の寶でなくてはなりません。私共は母性として此の寶を磨くために、

そして眞の寶とするためにどれ程の事をしてゐるでせうか、靜かによりかへつて考へてみます時にまだまだ努力の足りない點、努力は充分して居ても自己の修養の足りないため、或は學校との連絡が不充分なため好結果を擧げる事の出来ない點を多々想ひあたります。

なほ現在好成绩を得つゝありましてもより以上立派なものにするにはとの懇求も惱みも生れてまゐります。

私共は右の事項に鑑みまして近藤政好校長先生に種々懇願いたしましたところ大變およろこび下さいまして早速御承諾下さいました。

ことに種々會合の結果東須磨母の會が生れたのであります、爾來發展に發展を重ね現在會員數約八百を算してゐる盛況であります。

東須磨母ノ會々則

第一條 本會ハ東須磨母ノ會ト稱ス

第二條 本會ハ常ニ學校ト聯絡ヲ保チ學校教育ノ進行ヲ援助シ以テ子女



(念記式魂入旗會)

教育ニ盡シ併セテ會員ノ知見ヲ昂メ其他婦人トシテノ修養ヲ圖リ兼ネテ地方風教ノ振興ニツトムルヲ目的トス

第三條 本會ハ左ノ會員ヲ以テ組織ス

- 一、正會員 東須磨小學校兒童ノ母姉其他有志婦人及ビ東須磨在職女教員
- 二、特別會員 東須磨小學校男子職員
- 三、客員 東須磨教育會役員

第四條 本會ノ事務所ハ東須磨小學校内ニ置ク

第五條 本會ノ事業概ネ左ノ如シ

- 一、毎年一回總會ヲ開キ豫算決算並ニ會務ノ報告ヲナスコト
- 二、凡毎月一回例会ヲ開キ子女ノ教養其他婦人ノ修養ニツキ研究ヲナスコト
- 三、臨機ニ講演會、講習會ヲ開クコト
- 四、其他第二條ノ目的ヲ達スルタメ適切ト認メタル事業ノ遂行

第六條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

- 一、會長 一名 東須磨小學校長ヲ推戴ス
- 二、副會長 二名 幹事中ヨリ會長之ヲ推薦ス
- 三、主任 一名 特別會員中ヨリ會長之ヲ推薦ス
- 四、幹事 若干名

第七條 各役員ノ任務
1、會長指名ノモノ 2、互選シタルモノ 3、東須磨女教員

- 一、會長ハ本會ヲ統理ス
- 二、副會長ハ會長ヲ補佐ス
- 三、主任ハ本會ノ會務並ニ事業ノ計畫ヲナス



(氏子いあ嗣 故)

席會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルヲ要ス

東須磨母の會に就て

近時社會の各般に亘つて婦人の活動に依らねばならぬことは益々多様になつて参りましたが、何といつても母として其の子の教養に盡すことが最大最高の責任であり、使命であると信じます。洋の東西、時の如何を問はず、偉大な

1、幹事ハ本會經費ノ豫算決算ノ審議、本會ノ重要事業ニツキ評議並ニ一般會員トノ連絡ヲ計ルモノトス

2、校内幹事ハ庶務會計其他ノ常務ヲ分擔處理ス

第八條 役員ノ任期ハ三ヶ年トス 但再選ヲ妨ゲズ

第九條 本會ハ左ノ經費ヲ以テ維持ス

- 一、會費會員ヨリ月十錢騰出ス 但シ年二回ニ分納スルヲ本體トス

二、寄附金

三、雜收入

第十條 本會々則ヲ改定セントスル時ハ總會ニ於テ出

る人物の後には母の偉大なる努力が加へられてゐるといふ事實は疑ふことの出来ないところだと思ひます、かゝる意味からして家庭教育の如何に尊重せねばならぬか、察せられ、更に現時の我が國狀の動向を考へます時、いよいよ母としての婦人の修養の重要性を切實に感得するのであります。我が「東須磨母の會」は、眞剣にその家庭教育を目指しての研究修養機關たらしめ併せて學校教育を援助し以て子女教育に盡したい念願であります。どうか家の寶であり、國家の寶であるお子様の爲健全な東須磨文化研究機關の一となる様奮つて御入會をおすゝめ致します。尙御近隣にお心當りの方がありますれば御勧誘下されば結構であります。

昭和十五年五月

東須磨母の會々長 山下元治

母姉有志婦人各位

東須磨母の會入會申込書

貴會ノ趣旨ヲ贊シ入會申込ミマス

昭和 年 月 日

(現住所) 町 丁目 番地 番屋敷

(戸主名)

(兒童名)

(學年學校受持名)

(母姉の氏名)

東須磨母の會御中

二、沿革の概要

昭和十二年一月頃	會長	近藤政好	主任	高山他八郎
二・二八		山下元治		
三・六				近藤清七
四・六				
七・二三				
八・一一				
九・七				
十三年 二・一一				
四・一				
五・一七				
六・二七				
一〇・七				

○發起人會開催

○創立總會 會員數四三八名 世話係互選、會長推選、幹事、主任依頼

○發會式 會則並に申込書決定

○第一回例會開催 (これより毎月例會を開催す)

○新會會長歡送迎會

○昇軍へ獻納品 (武運長久鉢巻一五〇枚)

○臨時總會 (時局に處するため)

○建國精神宣揚大會開催

○高山他八郎氏若宮校へ轉校近藤清七氏主任に依頼

○第二回總會 會員數 五二二名

○役員改選 世話係一部改選 幹事一部改選 會長山下元治氏 兼任 主任近藤清七氏兼任

○本校職員退職の場合には全部の方に記念品贈呈一人標準五圓とする件可決

○出征入營者に對する赤誠 (會員の主人子に限る) 左記の通り贈呈す 世話係の家參圓・一般會員五十錢適當なものを見計つて贈る班全體の者が送る

○國民精神總動員 (廢品蒐集袋渡す)

昭和十三年	一〇・二二
〃	一〇・二八
〃	一一・三
十四年	四・二七
〃	五・一三
〃	五・二九
〃	六・二七
〃	九・二六
〃	一〇・二〇
〃	一一・五
〃	一一・一四
〃	一二・五
十五年	一二・八七
〃	一・二四
〃	二・一一

初野亦壽

- 廣東陷落祝賀會提灯行列参加
- 武漢三鎮陷落祝賀會提灯行列参加
- 市民厚生體育大會参加
- 市觀察研究會(當母ノ會)
- 第三回總會 會員數 五八八名
- 役員 改選
- 世話係一部改選 幹事一部變更
- 會長山下校長重任 主任近藤清七氏重任
- 神戸市出身戦歿者招魂祭参加
- 近藤清七氏主任松野實業學校へ轉任初野亦壽氏主任依頼
- 會員の體力テスト實施す
- 最軍慰問第一戰將士ヘサンデー毎日送る(一〇〇部)
- 靖國神社大祭につき遙拜式舉行
- 體育大會開催
- 市聯合母ノ會功勞者表彰會(三年以上勤続者中より)参加
- 案内状及び通知書發送方變更可決
- 幹事の係一部變更す
- 出征入營に際(主人、子供)ては其の班にて見送る
- 會長の名刺持参、學校へ通知のこと、謹別なし
- 會員中不幸のある場合(主人、子供、家族)同前香奠なし
- 出征家族、遺家族慰安會開催
- 須磨區恩賜修養會と母の會と聯合す
- 愛國宣揚大會開催

昭和十五年	三・八
〃	四・二二
〃	五・四
〃	五・一四
〃	六・八
〃	六・九
〃	六・一四

感謝状

右者兵庫縣神戸護國神社境域整地作業ニ奉仕シ一致協力シテ克ク奉仕ノ赤誠ヲ捧ゲタリ仍テ茲ニ感謝ノ意ヲ表ス

昭和十五年六月十四日

東須磨母の會殿

兵庫縣知事 從四位 坂 千秋 附

兵庫縣知事 從四位 坂 千秋 附

- 拜賀式參列
- 録播補式
- 會旗入魂式舉行(護國神社に於て)
- 須磨區愛護會教化部と合同にて講演會開催す
- 十五年度第一回修養會 出席者四百貳拾名 よろこびに生きる道 常岡一郎先生
- 幹事會 總會の件 新任職員歡迎會 名簿大整理の件
- 總會 會 午後一時より
- 一、一回着席 一、開會の辭 一、國歌齊唱 一、宮城通拜 一、山下會長挨拶 一、會務報告 初野主任 一、講演 香山熊吉氏
- 一、徳和會會員出演 一、萬歳三唱 一、閉會の辭 出席者會員四百七十名其の他約百名計五百七十名
- 母の會觀察研究會 板宿校出席者、兒玉幹事
- ハイキング並見學
- 兵庫縣神戸護國神社勤勞奉仕 知事より感謝状を受く

○東須磨母姉大會開催 參加者約七百名
 一、一同入場 一、開會のことば 一、宮城遙拜 一、神宮遙拜
 一、默禱 一、國歌齊唱 一、山下學校長挨拶 一、申合せ 一、
 映畫 父は九段の櫻花、世紀の闘争 一、閉會のことば 一、一同
 退場

三、節米ニ關スル申合せ

大東亞建設のためには愈々奉公の精神を振作し、相共に困苦故乏に堪へ以て時艱を克服せねばなりません。殊に戦時食糧充實確保は國家總力戰態勢整備上最も必要なることと存じます。特に節米に關しては母姉たるものの責任は重且大なりと信じます。

- 一、混食、代用食、完全咀嚼の勵行を致します。
 - 一、空閑地を利用し、食糧品の増産を圖ります。
 - 一、節米強調日を定め實行に努めます。
- 以て各家庭二割以上の節米を實行致します。

昭和十五年七月二十六日

東須磨母姉大會 代表者 和田 政 枝

四、昭和十五年産母の會係配當

- 主任 (沿革史) (公文書綴、會則及諸規定綴) 棚野 先生
 總務 (出席簿、會誌、其他諸般) 岡 先生

- 記 録 (講演、講習記録、事業記録) 安東、一色、北井 諸先生
 名 簿 (役員名簿、會員名簿) 馬城田、玉谷、三木 諸先生
 會 計 (會計簿一式、財産臺帳) 兒玉、釣田 諸先生
 幹 事 通 信 森、川、大石、渡邊 諸先生
 印 刷 (會旗、會則、申込書、洋紙) 森、小林、若山 諸先生
 物 品 保 管 録田、下村 諸先生
 古 物 販 賣 福田、山口、奥浦 諸先生
 會 場 世 話 梶野、岡、黒川、安東、福田 諸先生

古物月別世話係(受取、保管、整理) (敬稱略)

四月	兒玉、鎌田	八月	山口、釣田	十二月	馬城田、一色
五月	小林、森	九月	下村、北井	一月	玉谷、大石
六月	馬城田、一色	十月	兒玉、鎌田	二月	山口、釣田
七月	玉谷、大石	十一月	小林、森	三月	下村、北井

通 信 係(班別世話係) (敬稱略)

- 釣田、小林 一、二、三、四、五 一色、大石 六、七、八、九、一〇
 玉谷、下村 一一、一二、一三、一四、一五 安東、北井 一六、一七、一八、一九、二〇
 福田、三木 二一、二二、二三、二四、二五、二六 區外 黒川

五、昭和十五年産母(敬稱略)

班	幹事	所屬町目	幹事	所屬町名
1班	植田きく	大手一、六五	坂口やゑ子	大手二、八九
2班	小西富江	大手三、一二	大伴歌子	大手五、五八
3班	有川岸代	大手四、一二	難波公子	大手八、六
4班	松田富美	大手六、四九	岡田カメヨ	下細澤一九
5班	森田育子	大手七、二六	服部とき	寺畑二二
6班	堀 寸ま	上細澤一八	塔春久子	上堀内一二
7班	長田きみ	下兼廣三三		
8班	松井嘉久	上堀内一一		
9班	片山美穂子	下堀内二七		
10班	林田信枝	大田五、六〇		
11班	藤原糸子	我五、二四八		
12班	三輪秀子	大田七、一三四		
13班	小寺つる江	我六、八〇		
14班	村上文字	大池五、三〇		
15班	島田餘子	權現三、一八		
16班	小野政枝	權現二、四六		
17班	桑野こいと	長池一〇ノ二		
18班	吉澤小松	戸政一、九		

19班	吉本チヨ	戸政二、二三	編澤たみゑ	戸政四、四八	戸政四丁目
20班	柳野みつ子	戸政三、一三二	猪尾絹子	東寺田一〇三	東寺田町
21班	秋山實子	東寺田二、三六	深谷とも子	中寺田四〇	西寺田町
22班	上田みつ	東寺田二、四七	品川清子	下寺田町	下寺田町
23班	和田政枝	中寺田町	中川かめ代	大手官舎二五八	官舎上中島一丁目
24班	打田梅子	下寺田六二	樹田福恵	下中島二、五八	下中島町二丁目
25班	角田徳恵	上中島二、五六			
26班	大倉秋子	下中島一、五四			
區外	黒川綾子	下中島町一丁目			

昭和十五年 九・一九
備考 幹事の氏名は町目順にしました。

母の會、處女會觀察懇談會(午後七時—九時)
 參集者 母の會 二百五十人 處女會 五十人
 一、開會之辭
 一、君ヶ代齊唱
 一、宮城、神宮遙拜並默禱
 一、綱領宣讀(桑野こいと幹事)
 一、山下會長挨拶
 一、禮育會
 1. ラヂオ體操(全員)指導者新居先生

2. スプリンレース(一班→十班)
3. 運 搬 競 走(十一班→十五班)
4. スプリンレース(十六班→二十六班及區外)
5. 整 理 運 動(全 員)(新居先生)

一、懇 談 會

1. 本年度主力傾重要項報告(棚野先生)
 2. 視 察 感 想(市視察委員)
- (イ) モンペ着用の涼々しい姿を愉快に感ず
- (ロ) 國歌齊唱(熱意と國家愛を以て大へん元氣に歌へたのに敬服す)(よく小さい聲で歌はれるものだが)
- (ハ) 團體的訓練の必要を感じると共に今夜のスプリンレースを喜ばしく思つた(學校へ出ることをつまらぬと考へず團結してゐる、和らかな流れを感ず。
- (ニ) 茶、生花(不趣味で分らないが、熱心かどうかは入つてすぐ分る、大へん眞面目で熱心であつた、感心してゐる)
- (ホ) 本年度主力傾重要項を棚野先生よりきゝその計劃をありがたく思ふ。
- (ヘ) 母の會、處女會の實績頗るよし(須磨區 一、神戸一の會になる日も遠くないと思ふ)

一、協 議

1. 組合貯蓄の件 イ、是非組合貯蓄を作ること
ロ、現在貯金より三割位してほしい、ハ、隣保揃つて生活を落せばよい
 2. 節米の件(外米がなくなつたらもう節米なくともよいか?却つてその必要あり、十分節米されたし)
 3. 贅澤全廢の件
女……衣類(和服一寸見は、じみであるが金がかゝつてゐる。洋服金はかゝつてないが色が派手で職時生活向ならず)男……飲食、遊興、將棋等
 4. ぜいたく品を持つてゐる者はどうするか。
金糸・銀糸を更生する會社、高級品を上げる會社を作り、それを輸出する。
- 一、母の會員代表誓ひの言葉(岡田幹事)
銃後婦人として新體制國策に順應し、總力以て體位向上の實踐を通じて婦徳の美を發揮せんとす
- 一、萬 歲 三 唱
一、閉 會 之 辭
- 甘南備條(午前五時→六時半) 紀元二千六百年紀念節に賜りたる詔書奉讀式を行ひ後山下會長より大禮公夫人に關する高徳につき訓話せられました
大政翼贊三國結盟國民大會參加す

綱 領

- 一、忠孝の本義を體し日本婦道の「美德」涵養に努めます
- 一、心技を鍊成し歸依隨順の「行」生活に努めます
- 一、戰時經濟思想を涵養し更生活の「實踐」に努めます
- 一、家風を作興し「家庭教育」の振興に努めます
- 一、隣保相扶け「新體制」の國策に順應します

東 須 磨 母 の 會

第二十四章 東須磨處女會

一、創立昭和六年四月二十五日

本市處女會の設立發展に伴ひ、當處女會も時流に従ひ其の頃設立の議起りしも種々の事情に依り設立を見るに至らなかつたが先般市民早起鍛鍊會開催の際數名の御婦人の参加があり非常な御熱心と感激裡に終ることが出来ました。そこで一つ處女の方々にも斯る會を催してはとの議起り植芝康起會長以下全職員合議決議の上左記のやうな試みを行いました。

期 日 自一月三十日(日曜の節分を除く七日間)
 時 間 毎夜午後六時三十分—午後八時三十分
 行 事 唱歌、ラヂオ體操、舞踊、ダンス、朗唱、修養談等

ところが参加者四十名、酷寒にもめげず、終始一貫全員殆ど皆出席といふ熱心さを見たのであります。茲に於て各自確固たる決心の下に新に會員の募集に着手す、凡何の會でも同じことではありますが會員を集めることが第一義で殊に處女會の如き夜の會合にあつては尙更のこと何處の處女會でも之が痛をなしてゐるやうであります、須らく處女の心理を研究し之を捉へて以て指導方針を建て之を善導することが肝要ではありますまいか、固より指導に其の人を得ることは云ふまでもないことであります。

機熟し遂に創立を見たのであります。幸にも本校は女教員全部が誠に強い熱と愛を以て之が創立にあたられたので本日茲に發會式を見たのであります。發會式に於ける會長のことば次の通り。
 當會に本校の女教員全部が参加して居られることは、今後當處女會の指導上に心強いこと、思つてゐます。皆さん

も此の會をして健全に發達させるやう御努力をお願いいたします。尙御歸りになりましたら御近隣の方々にも大切な時期でありますので過らしめないやうに處女としての歩みを續けしめるやうにとの覺悟を以て校下の處女は一名も洩れなく奮つて入會し共に修養に努められん事をお勧めする次第でありますと御傳へ下さい。

綱 領

- 一、忠孝の本義を體し婦徳涵養に努むること
- 一、實生活に適切なる智能を研磨し、勤儉質實の風を興すこと
- 一、體育を重んじ健康の増進を期すること
- 一、情操を陶冶し趣味の向上を図ること
- 一、公共的精神を養ひ社會の福祉に寄與すること

二、沿革の概要

年 月 日	會 長	副 會 長	主 任	備 考
昭和六年 四・二五	植芝康起	江木益三	小山よし	創立總會 會員數四十名 役員推戴選舉 發會式 頒領
五・六				○總會 午後七時より 一、開會の辭 一、國旗掲揚・君が代 一、鐘魂 一、禮拜 一、植芝會長・江木副會長のお話 一、處女會の歌 一、國旗降納 君が代 一、修養科目 讀書、習字、珠算、裁縫
六・八				○午後六時三十分より講堂に例會、後各分科により修養なす

年 月 日	會 長	副 會 長	主 任	備 考
昭和七年 二・二五	近藤政好	安平吉太郎		○午後七時より各部に分れ修養 ○七夕祭参加す ○午後七時より各部に分れ修養 ○運動會賣店開催す ○生花講習會 ○生花講習會 ○午後七時より映畫會開催す ○午後七時より例會 ○總會講演及映畫 會員數四十五名 ○午後七時より例會 ○午後七時より各部に於て修養 ○午後七時より唱歌練習 ○七夕祭参加す ○午後七時より例會 ○運動會賣店開催す ○午後七時より茶話會 ○午後七時より料理講習 ○新會會長並に副會長送迎會 午後七時より講堂に於て 新會會長近藤政好氏 新副會長安平吉太郎氏 舊會會長植芝康起氏 舊副會長江木益三氏
昭和八年 四・二〇	近藤政好	安平吉太郎		○總會 會員數七十名 一、開會の辭 一、國旗掲揚 君が代 一、鐘魂 一、禮拜 一、近藤會長、安平副會長のお話
五・六				

昭和九年	二・一	二・七	一・一四	一〇・二一	九・九	七・一五	六・一〇	五・一五
------	-----	-----	------	-------	-----	------	------	------

一、處女會の歌 一、國旗降納 君が代
 一、本年度修養科目擔任 讀書—安平、近藤 習
 字—小山、日高、兒玉 珠算—玉谷、香川、眞田
 裁縫—芥川、高橋、森木、青山 手藝—富山、上
 町、岡田 一、映畫—母、北海道の實寫 一、閉
 會の辭

○例會午後四時より 女子會館建設費繰出のため、
 (東京に建設) 菊關西學院に於て音樂舞踊大會五
 月二十一日開催につき會員方に百四十枚割當られ
 たのも直に區内篤志家を訪問勸誘し好成績を擧ぐ
 ○例會午後七時より 安平副會長の挨拶唱歌及び舞
 踊の練習(尊く生きん)

○例會午後七時より、茶話會、西瓜、お煎餅、會員
 意見發表

○例會午後七時より各部に分れ學習修養會
 ○正午より例會 參加者八十名 玄米會試食會高壓
 釜により玄米並に副食物の炊き方に付説明魚類の
 骨まで軟くなつて小兒にも容易に食されて營養價
 値大なり

○午後六時三十分より裁縫部のみ開催の縫方實習
 す

○例會午後七時より各部に分れ學習修養會
 ○例會午後七時 近頃になつて會員數減少の傾向な

七・七	五・二二	四・二〇	三・八	二・一八
-----	------	------	-----	------

り、嫁入のためと郷里へかる者相多くありたり
 ○例會午後七時 會員數僅かに十名にすぎず裁縫部
 のみ開催す、皆熱心なり、心づよく思ひます

○例會午後七時 唱歌、舞踊練習

○例會 新學期を迎へたるも會員少數なりここ
 に於て本年度係左の如く決定
 小山、芥川、上町、高橋、香川、元山、調導
 會員募集の件を残す

○會員募集の件につき協議
 1、各係を左の如く定む 學校を中心として
 西部方面 小山調導 東部方面 香川調導
 北部方面 芥川調導 南部方面 上町調導
 校内整理係 高橋、元山調導

2、總會の件 七月上旬に開催
 3 會員募集を六月中に完了すること
 4、六月例會は中止とす

○總 會 午後六時半 會員九十名
 一、開會の辭 一、國旗掲揚 君が代 一、鎮魂
 一、遊拜 一、滿鮮地方旅行談(近藤會長)
 一、處女會の歌 一、國旗降納 一、映畫 一、
 閉會の辭

感想 私達指導員の趣意書を持ち各戸別に訪問を

昭和十年	三・一〇
〃	四・一八
〃	五・八
〃	五・二三
〃	六・二〇
〃	七・七
〃	八・七
〃	九・五
〃	九・一七
〃	一〇・二三
〃	一一・一五
〃	一二・七
昭和十一年	一・一一
〃	二・八
〃	二・一一
〃	三・一〇
〃	四・二一
〃	五・一六
〃	六・一〇

- 例會 午後六時 生花實習二組に分れ實習す
- 例會 映畫會 皇國の榮其の他
- 大補公六百年大祭記念として旗授交附さる
- 大補公殉節六百年記念講演會開催
- 例會 午後六時半 禮節講習會
- 例會 午後六時半 各部に分れ學習修養
- 七夕祭に参加す
- 市聯合處女會理事會出席
- 市聯合處女會總會 湊川神社七生館總會決議の結果、當校小山よし訓導市聯合處女會理事會當選さる
- 例會 午後七時 各部により修養をなす
- 講習會 講師 眞島智茂女史
- 社會教育指導員講習會開催 出席者 芥川、上町 高橋、香川、元山諸先生
- 例會 午後七時 指導者講習會報告並に作品展覽會開催の件
- 作品展覽會 七生館 午前九時より午後五時まで
- 建國精神宣揚大會參加
- 例會 午後七時 各部により修養す
- 講習會 午後一時より包紙の折方、水引の結方
- 總會順序前同 會するもの約九十名、盛會であつた。
- 例會 午後七時 各部により修養

昭和十一年	七・五
〃	七・一六
〃	八・七
〃	九・一
〃	一〇・二三
〃	一一・二五
〃	一二・二〇
〃	一二・二三
昭和十二年	一・二〇
〃	二・二三
〃	三・一六
〃	四・二〇
〃	五・二九
〃	六・二二
〃	七・二三
〃	八・七
〃	九・二一
〃	一〇・一九

山下元治
長谷川章三

高橋文子

- 例會 午後七時 主として裁縫講習をなす
- 會員報告 二十歳以下九十八名 出席者六十五名 二十一歳以上十名 出席者八名
- 七夕祭參加
- 體操講習會 午後六時より盛會であつた
- 例會 午後六時半 唱歌、舞踊を主とす
- 市理事長推戴の件 市教育部長川島傳三氏
- 主任小山よし訓導退職により主任辭任さる
- 例會 午後七時 各部修養後公禮期間につき訓話後茶話會主任小山よし氏送別會開催す
- 例會 午後七時 修養會、後新任高橋文子氏 紹介歡迎茶話會開催
- 講演會 午後七時
- 例會 午後七時
- 總會 午後七時 青年學校女生徒を連會員とす 順序前同と同様
- 映畫會 處女の誇其の他
- 映畫會 皇國の榮其の他
- 歡迎會 新會長、副會長歡迎茶話會 送別會 會長 長近藤政好、副會長 長安平吉太郎氏送別會
- 七夕祭參加す
- 例會 午後七時 各部により修養
- 體育會 午後六時より

昭和十二年	一〇・三〇
〃	一一・三三
〃	一二・二二
〃	一二・一四
昭和十三年	二・二二
〃	三・一
〃	三・一五
〃	四・一〇
〃	五・二七
〃	六・二〇
〃	八・七
〃	九・二〇

- 講演會 午後六時より修養講話
- 講演會 午後六時より時局問題について
- 映畫會 午後七時より(母と子) 其他
- 義士會 午後七時より
- 總會 一、開會の辭 山下會長 一、國旗掲揚 君が代 一、鎮魂 一、送拜、宮城、神宮、樺原 靖國神社 一、默禱 一、山下會長のお話 一、 處女會のうた 一、國旗降納 君が代 一、映畫 會 一、閉會の辭
- 講演會 修養講話 毎月の例會は通知を出さないで各會員出席のこと 十五日午後七時集合のこと
- 講演會 例會を講話會とす、時局に關する話
- ハイキング 晝食、ハンカチ、ちり紙、水筒の用意
- 海軍記念日式典參加す
- 料理講習會 午後七時 理科室に於て
- 神戸市未會有の水害を被り、當處女會員率先して 勤勞奉仕に従事す、天上川土砂あげをなす
- 總會 時局と私等の覺悟につき山下會長よりお 話あり左記の通り決議す
- 1、勤勞奉仕 2、遺骨の出迎へ 3、遺家族訪 問等 4、出席者山下會長、長谷川副會長、主任 高橋文子氏、保福田美代子氏、山田都世氏、會員

昭和十三年	一〇・三三
〃	一一・一〇
〃	一一・一八
昭和十四年	一・一七
〃	二・一一
〃	四・二〇
〃	四・二七
〃	六・三
〃	七・二一
〃	九・二〇
〃	一一・一八
〃	一二・二一
昭和十五年	一・二〇
〃	二・一一
〃	三・一
〃	三・三
〃	四・二二
〃	五・二二

- 約四十五名
- みなとの祭禮操會參加
- 講演會 大日本處女と支那事變について
- 傷病兵慰問に當處女會より左記參加慰問す 四元 しのぶ、川井田文子、西和子、宮崎操子
- 滿蒙開拓青少年義勇軍激勵後を送る
- 勤勞奉仕狀況報告 勤勞奉仕作業種別 天上川砂 出、勝福寺砂取除奉仕延日數六奉仕延人員一〇二
- 建國精神宣揚大會參加
- 總會 順淳前年度とおなじ映畫會を開催す
- 相互觀察研究會開催(市主催)
- 背山ハイキング 會員二十四名
- 料理講習會 理科室
- 講演會 修養講話
- 體育會開催 午後六時より盛會であつた
- 講演會 時局と處女について 映畫 杉野兵曹長 の妻 其他
- 例會 午後七時より各部に分れ修養會
- 建國精神宣揚大會參加
- 總會 午後六時半 羅祭を行ひ會員の意見發表 茶話會をなす 會員 四十名參加盛會であつた
- 例會修養會 よろこびに生きる道
- 映畫會 處女の誇り其他

褒 狀

東須磨處女會員一同

昭和六年乃至九年事變ニ關シ其ノ財ヲ寄附ス仍テ褒章條例ニ依リ之ヲ表彰セラル

昭和十二年五月十九日

賞勳局總裁 下條 康 磨 印
從三位勳一等

少年赤十字團ノ目的ハ少男少女ヲシテ夙ニ博愛ノ精神ト衛生ノ思想トヲ涵養シ其ノ實踐躬行ニ努メ尙ホ進ミテ海外ノ兒童ト相親ミ相授クルノ慣習ヲ養成セシムルニ在リ
少男女ハ成長ノ後父祖ノ意志ヲ繼キ各ソノ業ニ勵ミ我カ光輝アル國家ノ基礎ヲ鞏固ニシ世界人類ノ融和ヲ圖リ福祉ヲ増スノ覺悟アルヲ要ス其ノ責任重且大ナリト謂フヘシ
惟フニ善良ナル國民ノ養成ハ教育ニ待タルヘカラス而シテ其ノ効果ハ實踐躬行ニ由リテ始メテ完全ナルヲ得ヘシ我ガ少年赤十字團ハ其ノ應用ニ於テ實ニ重要ノ機關タリ諸子克ク此ノ意ヲ體シ常ニ人格ノ修養ヲ怠ラス至誠奉公ノ訓練ヲ積ミ以テ本團設立ノ趣旨ニ副ハムコトヲ望ム
大正十四年六月十日

日本赤十字社總裁大勳位功二級 載 仁 親 王

第二十五章 東須磨少年團

一、概 要

大正十二年三月赤十字主義に基いて博愛の精神を發揮し、且健康増進を圖る爲、少年赤十字社の設立せられるに及んで本校はその趣旨に賛して加名し、日本赤十字社兵庫支部東須磨少年赤十字團の出生を見たのは大正十四年六月十日であつた、然るに昭和七年十二月文部省が兒童生徒の校外生活指導に關する訓令を發し、更に之れが趣旨徹底のため、少年團の組織を惹越し、以て小學校第三學年以上高等小學校及中等學校低學年の男女兒童生徒全員に對し校外生活を指導し、進んで社會生活に關する實際的訓練を施し學校教育及家庭教育と相俟つて國民教育の徹底を企圖するや本校少年團に於ても組織強化の必要を痛感するに至つた。

先づ目標を國民教育の徹底に置き次の諸點を強張す。

- 一、明徴なる國體觀念を興ふ
- 一、學校教育と家庭教育の連繫を緊密にす
- 一、校外生活の指導を徹底し、社會共同生活の基礎を體驗を通して訓練す

其の組織は三年以上の兒童全部を團員とし、之を六分團に分ち團長の下に統一する、細しくは次表の通り。
現在實行しつゝある事業を列擧すれば概略次の如くである。

- 一、毎月一日若しくは十五日に神宮拜禮、皇居遙拜、氏神參拜をなす。
- 一、神社佛閣の境内清掃。

- 一、在營出征兵士の慰問。
- 一、同家庭の慰問。
- 一、興亞奉公日の奉仕作業。

二、東須磨少年團役員割當表 (昭和十五年度)

分團及分團長	班別	副團長	長谷川	城	班長並指導者
第一分團 安田	大手一、二、三、四、五、六、七、八、九、十日 大手二、三、四、五、六、七、八、九、十日 權現町一、二、三、四、五、六、七、八、九、十日	副團長	長谷川	城	安田、竹内、山口、脇田、岡、若山、玉井、藤田、清瀬、柳井、鎌田、石間、田村、上松、兒玉、前川、小林、香川、植野、福田、大石、北村、馬城田、一色、田邊、新居、渡邊、圓山、伊藤、森、津崎、由利、黒川、村野、中山、玉谷、村原、田淵、高橋、西村、大藤、貞浦、編、松本、釣田、藤井、安東、三木、高、有岡、下村、能美、吉岡、北井
第二分團 田村	寺畑内班 寺畑内班 寺畑内班				
第三分團 田邊	長池内班 寺畑内班 寺畑内班				
第四分團 野	寺畑内班 寺畑内班 寺畑内班				
第五分團 綱	下中島班 上中島班 戸政二班 戸政一班 戸政二班 戸政三班 戸政四班 戸政五班 戸政六班 戸政七班 戸政八班 戸政九班 戸政十班				
第六分團 能美	大池班 大池班 大池班				

編輯の経過について

東須磨小學校六十年史の編纂は本校創立六十周年の記念であり、國家としては皇紀二千六百年を迎へた記念すべき住き年であり皇國民としては教育勅語頒布五十周年のよき年であります。

我校は此の紀元二千六百年祭典記念事業の一として校史編纂が計畫されたのであります。而し六十年間の業績を上梓する業としては到底一朝一夕に遂げられるものではないので去る昭和十三年五月三日現山下校長は校下父兄各位に其の趣旨を傳へられた所非常なる賛成を得る事が出来たので、資金募集として毎月少額の贈金を願つたのであります。一ヶ年後に於ける成績は良結果でありましたので、校長先生はこゝに着手の第二步として昭和十四年五月一日編纂委員長として私に此の大業を命ぜられたのであります。不肖其の任ではありませんが委員並に有志の方々の御援助を得て此の業を全うせんものとお受けした次第であります。直ちに立案に掛り同年五月七日左記委員任命になりましたので同日第一回の會合を校長室に開催いたしました。

- 委員 梶野 亦壽先生 安田 悦二先生 玉井 憲一先生 脇田 秀人先生
松本 健先生 高 敏雄先生 由利 昌一先生 大藤 藤吉郎先生

山下校長より挨拶の後、私より原案を提出し承認を得ましたので各委員に分擔依頼いたし五月末日迄に系統的の打合せをなすこと、六月末日までに諸調査を完了すること、九月末日までに原稿提出すること等を協議し閉會いたしました。其の後資料蒐集に數回の會合を要し各物置部屋、校長室、書棚、圖書棚等隈なく捜査し尙も參考資料と思はれるものは一切校長室に移管いたしました。

斯くして着々執筆に取りかかりましたが、何分六十年以前のこととて不明の點が多く記録が不明であつたり全然わ

からぬ所等種々困難に出合ひまして少しも進まない状態となりました、この一ケ年は苦しい多忙な年でありました。年新たまり古老會を開催してはとの議が起り、茲に於て昭和十五年一月十六日(火)午後四時より協議懇談會を開催いたしました。

出席者氏名(順序不同)

兼吉寛兵衛氏 河井榮太郎氏 堀 晋 吉氏 香山熊吉氏 森本俊治氏
近藤政好氏 山下元治校長 長谷川章三氏 梶野亦壽氏 安田悦二氏
玉井憲一氏 脇田秀人氏 高 敏 雄氏 山利昌一氏 松本 健氏
大藤藤吉郎氏

山下校長の挨拶の後私は、校史編纂者を代表して挨拶を兼ね経過報告をいたしましたして協議懇談にうつりました。ことに本地方有志元老の方々でありまして有益なるお話を受け賜りました。

かくして新しい方面を見出し再び諸調査に着手いたしました殊に兼吉氏からは貴重なる證書をお借りして本校の一貫せる校名を判然と知ることが出来ました。こゝに出席下さいました方々に厚く御禮を申します。

執筆は着々と進み原稿の大部分は完成に近づきました、八月の休暇になつて委員の方々は御苦勞でありましたが參集を願ひ統一と小部分の補筆等を願ひ、各前校長先生方には自己修正を願ひいたし完璧ならんことを期したのであります。(山利先生は家庭の都合上退職せられましたので北村上松先生を依頼しました。)

九月の第二學期を迎へると共に北村久雄先生上松那雄先生に御力添へをお願いいたしました。尙本書のため勝田市長、奥村閣下、川島教育部長、堀教育會長より題字並に序文をいただきまして一層の光彩を加へた次第であります。斯くして多大の時日と精力を竭して編纂したものであります。こゝに謹んで偉大なる背後に働く力を感謝すると共

に徳永印刷所が全員一致の美をさへげて徹夜の苦しみを意とせず心魂をうちこんでの精勵振りや、村上寫眞館主の熱誠振りは實に涙ぐましいものがあつて本校々史のため一段の意味を添へてくれた事は編纂委員一同はまことに喜びに堪へないところであります。

ここに重ねて感謝の意を表す。

昭和十五年十一月

東須磨校六十周年史編纂委員長

梶野亦壽

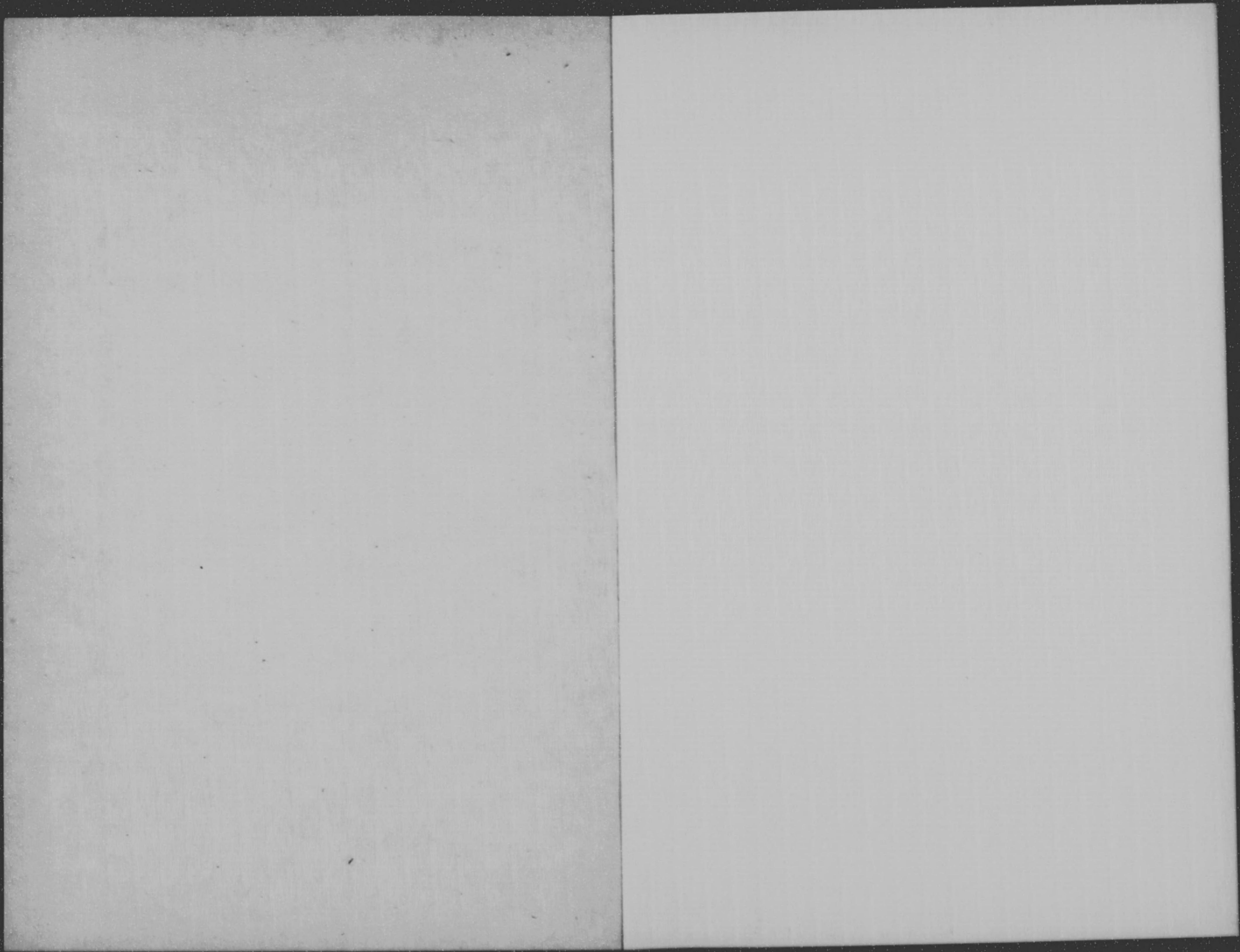
昭和十五年十二月三日印刷
昭和十五年十二月十一日發行
(雜費品)

編輯者 山下元治
神戸市須磨區長池町

發行所 神戸市東須磨尋常小學校
神戸市須磨區水木通四丁目一三二

印刷者 徳永知也
神戸市長庚區水木通四丁目一三二

印刷所 徳永印刷所
電話兵庫②二〇〇五番



406
323

